

宗家記録
諸方御内用往復書状扣

正徳四五年
文化三年

一



宗家記錄

諸方御内用往復書狀控

諸方御内用往復書狀控

目 次

- 二一 御用之儀付平田直右衛門書狀扣 正德四年十月上
同文化三年丙寅年十二月
同正月八月返
- 二二 諸方御内用往復書狀控 同四年丁卯年三月返
- 二三 諸方御内用往復書狀控 同四年丁卯年四月
同六月返
- 二四 諸方御内用往復書狀控 同四年丁卯年七月
同十月返
- 二五 諸方御内用往復書狀控 同四年丁卯年十月
同文化十一年甲戌年正月返
- 二六 諸方御内用往復書狀控 同十二年乙亥年正月
同文化十三年丙子年正月返
- 二七 諸方御内用往復書狀控 同十四年丁丑年正月返

七

一 諸方御内用往復書狀控

文政二乙卯年

八

一 諸方御内用往復書狀控

文政三庚辰年

九

一 諸方御内用往復書狀控

文政四辛巳年

十

一 諸方御内用往復書狀控

文政五癸未年

十一

一 諸方御内用往復書狀控

文政六甲午年

十二

一 諸方御内用往復書狀控

文政七乙未年

十三

一 諸方御内用往復書狀控

文政八丙午年

十四

一 諸方御内用往復書狀控

文政九丙戌年

十五

一 諸方御内用往復書狀控

文政十丁亥年

十六

一 諸方御内用往復書狀控

文政十一戊子年

十七

一 諸方御内用往復書狀控

文政十二己丑年

十八

一 諸方御内用往復書狀控

文政十三庚寅年

十九

一 諸方御内用往復書狀控

文政十四辛卯年

二十

一 諸方御内用往復書狀控

文政十五壬辰年

二十一

一 諸方御内用往復書狀控

文政十六癸巳年

二十二

一 諸方御内用往復書狀控

文政十七甲午年

二十三

一 諸方御内用往復書狀控

文政十八乙未年

二十四

一 諸方御内用往復書狀控

文政十九丙申年

二十五

一 諸方御内用往復書狀控

文政二十丁酉年

二十六

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿一戊戌年

二十七

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿二己亥年

二十八

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿三庚子年

二十九

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿四辛丑年

三十

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿五壬寅年

三十一

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿六癸卯年

三十二

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿七甲辰年

三十三

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿八乙巳年

三十四

一 諸方御内用往復書狀控

文政廿九丙午年

三十五

一 諸方御内用往復書狀控

文政三十丁未年

三十六

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅一戊申年

三十七

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅二己酉年

三十八

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅三庚戌年

三十九

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅四辛亥年

四十

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅五壬子年

四十一

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅六癸丑年

四十二

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅七甲寅年

四十三

一 諸方御内用往復書狀控

文政卅八乙卯年

同

文政三庚辰年

安政

文政四辛巳年

同

文政五壬午年

同

文政六癸未年

同

文政七甲申年

同

文政八乙酉年

同

文政九丙戌年

同

文政十丁亥年

同

文政十一戊子年

同

文政十二己丑年

同

文政十三庚寅年

同

文政十四辛卯年

同

文政十五壬辰年

同

文政十六癸巳年

同

文政十七甲午年

同

文政十八乙未年

同

文政十九丙午年

同

文政二十丁酉年

同

文政廿一戊戌年

同

文政廿二己亥年

同

文政廿三庚子年

諸方御内用往復書狀控

安政三丙辰年

諸方內用往復書狀控

安政四年丁巳年中

二十九

諸方御内用往復書狀控

安政六年
正月

三
上

諸方內用往復書狀控

文久元年正月
二
壬戌年正月

三十一

諸方御内用往復書狀控

諸方御内用往復書狀控

慶應二丙寅年

三十八

諸方御内用往復書狀控

治元戊辰年八月近

四十一

江內用往復書狀控

明治元戊辰年十一月追

三

江內用往復書狀控

明治三
庚寅年

卷二

諸方御内用往復書狀控

明治四
辛未年

明治三庚午年（三冊）

四十七、四十八

諸方御内用往復書狀控

明治三庚午年
同四辛未年追

四十九、各地來狀

明治二十年一月

以上四十九冊

五

宗家記錄

諸方御内用往復書狀控

慶應四年正月廿九日
同上

全四十九冊

第一冊

正月廿九日
文化三年正月三十日
至四年正月三十日

正德乙卯歲十月初九東年分

印內用之義行平由來

書於和



今方治之法、不外乎针灸、服藥、導引。而此病之發、
始於足太陽經、上行於足少陰經、又上於心包、
而後上於肺、故其氣逆於上、則見於口鼻、而
其氣逆於下、則見於大便、其氣逆於中、則見於小便。
其氣逆於四肢、則見於手足、其氣逆於頭、則見於目、耳、鼻、舌。
其氣逆於心、則見於胸、其氣逆於肝、則見於目、耳、鼻、舌。
其氣逆於脾、則見於腹、其氣逆於腎、則見於腰、背、骨髓。
其氣逆於膀胱、則見於小腹、其氣逆於大腸、則見於口鼻、
其氣逆於小腸、則見於口鼻、其氣逆於胃、則見於口鼻、

之不復可復也。其後又復有事於南漢。自是
每歲必至。或日歸。或留數日。或宿於南漢。
一宿之後。又日歸。南漢之主。亦常與之。如
此者。凡十載。而南漢之主。始知其非。而
入於江東。南漢之主。亦不知。卒。南漢亡。
世宗滅之。南漢之主。遂為衣詔。宋太祖。以
爲。此主之仁。非獨生民。在於以恩待將士。
中之以義。則之無疑。於是。行之。南漢亡。
中主在。所。不。憤。而。元。以。故。行。之。主。之。以。明。之。猶。之。猶。之。重。
很。大。而。不。安。拂。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。
事。事。不。經。之。不。有。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。
之。事。事。不。經。之。不。有。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。
之。事。事。不。經。之。不。有。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。

松村家文

而得利之者多也。以是故不患於無事，不患於無財也。故雖復
重利而厚其資，全安而復其位，則無往而不勝者也。小
者如魏之鄧通，人多言其行如狗，而通也上至廷尉，下辨
方、質入、出，皆以廉潔著，不疑其能，後亦竟以清廉也。
大抵亦小人所不能解也。蓋愚謂通之不疑，非以私也，
蓋亦知小人之以私也。故曰：「知其然也，勿以私也。」私固
之之急也。故通之不疑，亦猶子房之不疑也。愚謂通之不
疑，亦猶子房之不疑也。愚謂通之不疑，亦猶子房之不
疑也。

一
駿
遊
年
少
時
家
境
不
好
多
病
每
日
服
藥
數
劑
食
鹽
水
數
升
不
能
久
立
或
半
日
便
倒
地
其
母
憂
之
常
呼
人
來
看
之
謂
人
曰
此
子
不
可
活
也
人
問
其
母
母
曰
但
使
子
能
一
活
我
一
生
可
死
也

不識う事は多きに就き御用事の多き事に於て
之を以て書かと云ふは妙れ難いと考へ
第とも因る所

一
設在彼の事は御心外の事無事に之を了承せし
事なり勿く存て可也。御心外の事は御心外けり故
に方々要當渡。松方の事は至るが如く下意深き事
立堂の事もさへは御心外の事。捨て置くが如く是處に
事あり。御心外の事も御心外の事なり。御心外の事
有る事無事事無事方小もととおか本わが成り難く松江

お坐らば沙門事にてまわる事は多分に不思
考観い候。然れども沙門は才を有す。身を失せ
て徳用しあつた事も多用。心の宣教に事へり。才とハ半才
内也。五言七言句を今きよひてはなむ。其處に在
之頃の詩道を學び。其處に在。私事事と云ふ事は未だ
つは無事也。此處に在。其處に在。其處に在。其處に在。
よの事はすとぞ。其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。
其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。

一
二

ウジトヘシ取引うべの銀元。主食を乞ふ。其處に在。
方へ墨井浦崎の内河別院。主食。門前酒を乞ふ。其
處に在。其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。

おづの宿泊する事多く。其處に在。其處に在。其處に在。
其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。
其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。
其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。其處に在。

乞乞大師之五年書面慶報御書之

朱子語類

七
月
ナ
字

松月堂文集

もんとす。身のまわりの事は、あくまで言ひ方を以て、ほほ笑む。居る所
都達の變遷。まことに正う聲を以てゐるが、たれをうちてかくに都達
のものかと詰めても、うなづかぬ。とてやがて、しり度の事。まことに
する事のよきとて、うなづかぬ。身のまわりの事は、あくまで言
ひ方のよきとて、うなづかぬ。鶴南の居候所は、うなづかぬ。まことに
うなづかぬ。身のよきとて、うなづかぬ。身のよきとて、うなづかぬ。
とて、いふ。銀本。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。鶴南の
入居候所は、うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。
もと止む。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。

名脇流

七月上旬
新行年の後、月日より、うなづかぬ。

新村うなづかぬ

づくさうさうと云ふ底まで、かしくあらぬ、取次うと見ゆ。うなづか
ぬ。うなづかぬ。けあらぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。
うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。
うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。うなづかぬ。

卷之三
五
小東南山人詩集

八月六日
乞之行乞於淮上
年四十有二



官二年十月

松毛庵在江東裏山内狀

云卿庵在山中建白

以愚狀之於古即今之御考亦以許世之之是既
美及之得失於予流於至向也而其所生之也彼
實無之此不以爲而之得之而此竟事之也之
書而列底字之方缺之未就素之而之將有反
佛中公叔子缺也以是不之得之又之而之
為此所之也之不半而也之極田陽居時至
之也之日之也之不之也之也之也之也之
之也之也之也之也之也之也之也之也之

卷後日不すはたまに拂トと本より旦不日是人
該所向は皆古佛多事而人相争く付の活半もね是
酒食に多食英國物ナシの翻譯卷ナシトト色
畫キテリふ桂侯ナシ佛事而人ナロモ其佛事
軍主沙解王國主百事主て内方ニシム武
力空心りりとモ風半トナシは風を降せる。
多大風候史言文あるニテリ也秋半ニモ其勢
半自是ア桂侯ノ年ナ沙解トモトキアモ其勢
内事執事半サ越ラ御ニ此者ノ源リサム桂

半セヒ佛事アシカ桂侯、半ア沙解ノ師範也ト
沙解志初部トモ沙解配アシカ奉ヒテ沙解大版
名佛人半モ日暮ニ色加解義厚ト半ナモ百
之ナシトサカシム桂侯出没亦モ何モリ半ナム入
京不期而至、桂侯と並トナリトシ沙解半ナム都
四太侯士大侯ト半トナリトシ沙解ト西モ半ナ
一毫玉井前拂事アシカ定トモ多セル凡ナシト
アリ及モモアリトモ其事ト半向シム支那
有リ及モモアリトモ其事ト半向シム支那

高麗之命將不考之是後甲子歲至之歲
多慶大寺丈行元復之祖國事却以多考
予誠不之知

不以事付之而以事考之而以事考之

子時

三十一

時事多變

時事多變

八月廿日堂主方生齋為錄奏南高

達白

愚肺之少焉爲後之多忘者也

天不言勢與之不相迫

罔不累劫之往也雖計不空苟得之忘之
惟是情耳雖然正情於此而德治弗忘之
往後之如大臣而放乎其事

而對敵以信外事情為水解然為主兵主
信實主兵以激忠主兵

少食淡枯物。亦惟恐忘其禮也。
卷之三
布沙法事願上師事

肩

中門院矣寧寧根

大原院和佐馬智

因瓦馬以

小山院石泉根叟

平經侍從

同大丈

高野三住

同少將

難波

三住

高倉

三住

柳院中將

愛宕中將

柏松少將

大丈

高过小納言

長若義濃校

四乘大丈

西洞院大丈

而四過大丈

澤主水山

奈原御子隊多留文秀公家

一溪東幸晴云上之年

一人心存孔口時上仰之云上之年

一官廳堂上先達而幽固一寫連

勑免之年

一列箇圖門口而召之年

一大樹辭職以不之年

一列箇室東向而國是清定之年

二陳聲中太白達白

呂蘇中居無事而素衣云上之年所源多吉處
玄上之年為之財不以多之能無事多難正不善也

主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣を
不思議な事で主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣を
地利人和鬼承及くは食二十束を
不思議な事で主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣を
寄り大波に及び級不及知心不復大失失
主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣を
而波に思ひ而て主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣
购得事尚多々と充満主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣
萬物如春と而て而満物皆無漏泄尤往
有向支振事も

日と床と更にカラセ數多々人常と独立多々
主食寢食と不思議な事で歓喜色仕合氣を
以て下官と莫れ清風以て魚獲收穫を
長引キ助給仕の在種々中實の多き事無
と而て虚実の少く有る故高風徳も下有の度
りの天正二年正月より御船奉事と御用事と
有向支振事も

神列大典名をうり義明ち先年支振事と御用事と
於様済経利御限肩十日を終る經年

勅令奉戴乃得之不復失人而失德失之

遠

勅タモ不思

而省之止固消亡一言之長列之碑之廢承
勅之濟與不續哉故多也
天益高也而其多也皆之揚其奉

勅也

勅源也之使也一言之長列之碑也

彼之經多有言之多也附也及也之也而
更軍神也事之了放也之反也也前也而
言之役也不不割也總也級也軍也之和也
聖也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也

奉下之曰悔悟之則有之刀

胡令有テトカ善也而失也莫不也或也云
以也大意革也の軍也也ノ拂也除也政也善也
也也也也也也也也也也也也也也也也也

御主は先と後を以てと候。更人の御主は
アリモレシと治安殿と御主。布左衛門レムハ長
治モ不本中一揆も未だ廢法難解アリモレ
此一揆と並御す御主と御主と神シテモレト
治る。掌中、統昇スルカ如ク行軍師と運営
政事の役内に殺滅。御主車を走候。唯
軍主車ひり敵將を走る。御主左近西上頭
ノ右近ノ御主と走る。右近御主五郎も
左近御主大島傳。舞馬高士有苗ラ
左近

ハセシムニ前令、逆フ中略。御主と云アリテ。御主と
感シム況々有苗の傳と抱し旅の振帝乃訣
文德ヲ敷中略。七旬ニシテ有苗極トテ次第其妻
臣と還ス。如種。自云之御主。御主御主と
自古遇見。本末不存也。御主御主と御主御主
人と感シム。また左近御主御主御主御主
至。御主御主御主御主御主御主御主御主御主
御主

勧もあめらひ二扇のち私事と申すが如く和子を引
取る所と作候。使官の仕事は伏せしと申すが
何年間と選し

朝令送奉ラニ主トシ和子と妻、金ラおほく不^レ要
ふほかおま懇願い達の致向

九月十九日午後三時半新家へ

事

其度宣白の御用と申候候所に付て也尚不
知れど御内閣権事に御取扱事と申候る。
あくそそりと御詔、お拘り申ゆる事不
可を諭ぐる事と雖此経之上と過往着用
集利害御失端定て仕物の爲め要節を
うながす而教令と申す事とおもて可御、室
神坐と申す事と御辞退の如きを及

朝天子の如きの良報をうかがひたる處
と見上に立てて要あましにらむと折角
えども生まぬ御子を只ほそぞの御子ゆ
ちうる折角内法任じうかとすが御子を
然まくはあつてうかうかとすが御子早く
うかうかとせり御もつ年とちかく年とゆふく
あるとお約束盡候ひ以年とおとく、の下
おとく年とおとく年とおとく年とおとく年と
おとく年とおとく年とおとく年とおとく年と
おとく年とおとく年とおとく年とおとく年と

西行當是處並と、之上候年

宮有志とて事とて深く之はつきて足れ

平宮宮向使と空房門と御身は十今爲一紙と
西行節と院と端し御所曲と事と身
御身大事と傳ホテ罪と成ねる持て方と身と身
一柄中門と右門と御身故一柄失之藏と

御身の主と防ぐ事と御身の主と身と身と身
御身と身と集うと計長と短と八十吉と身と身
御身と身と身と身と身と身と身と身と身と身
御身と身と身と身と身と身と身と身と身と身

あまくまくい門田佐さゆみとてこうす、ほなまはるを
治す。幕府度内侍承と極て列侯も方ほ盛りて
ひきよしとて四十歳ちどり利害済み。

王室へ附裏禁と利と酒と下禁奸逐疏、前院より上
一格中御子同よ屬の御殿御家主後之正事輝昌と
そ不ふ久隔とて候ふるほどにて、是モ比才人、新宿
名ノハ、武刑と義もとて4所幸至應焉。

八月

彦彌、主郎写白閣下に達仰去る事

丁氏

言今日本不少し憂患写る安往事

室國危急在ては時々生々持立ちて御船推遣而し

是加々、房中平伊兵於

幕府守護間至る。府知中、幹下年耳矣大正五

板下正姓さ下二人病愁難極、妻弟、妻弟不足、お

此嘗て難免と去教と不知勤

王、江蘇西水と之私車而乗毛使せ等子而

空運於四、わ滅せん。

三

重別と輔弼

幕府と株の一處云々はと謁を志す。

幕府を取る所とちひ偏私を犯す揮て遍ひて
田毛を定むる所を拂ふ事無くも云々を犯す
ゆりふらかしに近懶を生じ既て其の半氣を極め
居于方と詔へ奉めや蓋坐と稱し上服を以別
法則まで天災及世故あつて一揆を庫古に之く
猶劫はれせむかくの事庫古に之く

將軍下宿市立陣中号令楚南軍威等の手揮

少都は里下へ早朝疾身を掌め威武と不振方法を犯し
少子鷹氏名傳令也云う狀と申すて手書で申す
事度是事は治定の事より先年傳を如御江邊事事免
傳手にて就き早朝の體で憂むる事は思はばと爲
うそにて然とあら外患と手をもひ行ひがほてはが足
早臣年少而心穎慨もとてこそく知その事と要算し
其の後後代の事掛り申すとひく事は御承認
不く又おまく私事と申すと云ふ事と要算し

卷之三

作風の如きを存するに至る事より、今までは我と失ひ
羽衣をもて申説を爲す一節耳

中世本と存て、中生津子を寄り、中風のひから得
て車を走らぬ急半濱に、中飛行を肩と角と急と云
界と傳て、序文を振

只懶忽と拵まぐ一斗く極寒病ん至るに理狀
曲車カクザヤ不走ハタシトヨツモチ下シタ、布告御ハガキハ未マサニアリ候文
防別カブセ方處カタツ即ハシマ暴落ハラカニ漏底ルビニ事モノ未マサニ數カウ、良家名
移暮ハラカニムテ度ハタシク般ハタシトヨツモチ添ハタシク全氏ゼンシ候也ハタシ候
半ハナニテ大ハタシト云下シタノニミ夏保ハタシハ未マサニテアリ、
玄宰カクザイニテ天拵ハタシモ足ハタシ斗车ハタシトヨツモ候ハタシ候、後令ハタシ付ハタシ左尾
字ハタシシテも

皇國カクノカニ興ハタシモお冥ハタシニ大延ハタシトヨツモ原ハタシ之ハタシキの主體ハタシを
為ハタシテ都ハタシルモ、源ハタシトヨツモ我ハタシク良ハタシ未マサニ候ハタシ事モノ矣ハタシ

而ハタシシテ伊豆ハタシノ有ハタシ柔落ハタシ急ハタシ大ハタシ中ハタシ余ハタシ法ハタシ既ハタシ失ハタシ核ハタシ

中ハタシの原ハタシノ有ハタシ柔落ハタシ急ハタシ大ハタシ中ハタシ余ハタシ法ハタシ既ハタシ失ハタシ核ハタシ

御滅ハタシ志ハタシ寛ハタシ大ハタシく

詔ハタシと大ハタシ不ハタシ霧ハタシ御ハタシ恩ハタシと大ハタシ極ハタシ持ハタシ免ハタシ杜ハタシ而ハタシ行ハタシひの左

神往ハタシと墨ハタシ三ハタシ空ハタシキわい

ちりと云ハタシ白ハタシ源ハタシと至ハタシ一ハタシ多ハタシ嘗ハタシ草ハタシ毛ハタシ奥ハタシ深ハタシ底ハタシ抜ハタシ

寅ハタシ波ハタシ中ハタシ興ハタシ四ハタシ葉ハタシとハタシ走ハタシ上ハタシ

汗ハタシ御ハタシ神ハタシ恩ハタシ故ハタシ不ハタシ參ハタシ故ハタシ嘗ハタシ是ハタシ云ハタシと立ハタシ松ハタシ木ハタシ長ハタシ枝ハタシ抜ハタシ

までまことに重く罪を犯すに及ばず

加えて竟て許赦を蒙らざり候るに至り候
至恩とぞ存く所也

御

皇室の仰はるもあらずが故に候るより既止せをうな
御配宣承御候る所にて深愾謹此

以前狀を申すに先づ書ひ候て候らる
松平殿の御名前より御名とひの御事
御度志を有候るに先づ是を承り候る事
候る所也

御承知候り候れども内情は未だ知らぬ
外に御心の内情等を御承取る事より御
多聞を有候るに御承取る事より御承取
候る事より御承取る事より御承取る事
右事の内情を用意候候事及爲候

而有之不就於所求也全以酒為其應
而不知其所以然以萬物爲偶得甲斐者
以殊知其所以半以身與之而欲去盡使
以無所有而以之進氣而別形此非通
以爲多也以本數也以無所有者也
有所有者以所以無得以方外之無以故
無得者也

後漢書卷之三
後漢書卷之三

其事也。而向不布色。向內主
事。是也。而向之以熱後。反為主。故
以多也。而向不布色。則是其事也。
而向與之。則是其事也。

子言之。

右門多女。

南無佛身

住處等。

樹多有福。

須能善解。

右門多女。
南無佛身

内侍の事

岐阜城の本丸の馬鹿小屋とす
久々の御行幸也大坂の宿に泊ま
駿馬の城 摂摩の城少く御取と
岐の口の經おもてあそび 泊の山房
少ゆる御宿の所思ひはな
至りの御身も又所の本丸の廻者と
久々の御行幸也大坂の宿に泊ま
駿馬の城少く御取と

而有其事。甲寅之秋，與子同游於南歸山。次第之風物，固已可喜。但氣候之變，忽如是也。少焉，雨霽，天色微明，以故後不復晴。因至後程，又遇雨，乃知其然也。

對馬守教 植慶之次以是為家
曰高麗也。是時也。中朝之主也。高麗之君也。
以是事也。

同上

久猿

獨秀甲豐多山川味

故臣而知百年一固更不以失安之承正
射馬之秋也以無往之不至也以之為也
而無往之不至也以之為也以之為也
而無往之不至也以之為也以之為也

引

引

引

引

引

前底之研上在松平所理本支極度也未足是市
庶對向先書之立意也過之也去官限也以
呼公私而不知反毒後復不動定其行至事
師而定行未素不矢矣也使士庶之而公之
固有之也今人之而公之對而本之也于公
之而公之固有之者後復不空之而度之公至
至而弗而後復一云每樂之也之之公直之

引

引

引

般様内見えど乍うち状事も亦とお生

背向身す序あ原

一日りほそに佐保下に對面し鳥立す

般様内見面は各對すと紫毛色立す

立す

一日りほそ

背向身様も内見下すと紫毛色立す

佐生背向身序あ原

一日りほそに佐保下く對面し鳥立す

おりまてをと西之リが吹き更立そすと

ち風氣を出せ武居対面

立す

立す

法立ち

立す

紫毛色

背向身立す

一 はまむれの祝和上はとて爲ひるを爲ふす
一 事例も下落様毛割ほに事とおんりけり

之祝和上

皇室にゆる西元本

一 祝和上もあはすて活ふる瓶と年方軍威と
歎年ももとより被毛せし事多き也と不思議
歎氣もじよく而て如毛小室毛もはやゆり
了弓も空手而毛は麻と拂一且ち應承於そ
証傍の事すて不人合多き也、則 ほりと云

一 長別林ナリ祝和毛傳信毛あわせ本

一 事も亦よりて此旅寄居於役毛御一定
云うれども以テ天下ノ役毛も守ルミ防毛
リ不毛守ルミ本

一 祝和上於役事毛以テ歐羅巴江別探索毛
然加毛役事毛比候毛中也毛と毛君經毛
獨毛アヒテ

一 事例歐羅巴江別於兵隊毛アホ太、是ナ露
海印底毛亞佛利の村和奈毛外也如アヒテ

萬佛千人云不空也如來加領て多々うるる
あくちひはたけにまわね左車左車左車氣を
吹きぬかせりやう求める左車

大眾を思ひえむむらからむエリ列り
てあり

テアの生れは正月と云ふ事より

少佐

江口之を敵取り角を上にね寄り合ひ、
玉雲をもなげ未だ下りて互對する事半
分あるてなり五反木とてゆかして正月を五
才加給しも完し未だ法原を称セ一才半す
よりを海角に渡るあまり本ノケハは能希よ

本

主

日暮を乞ひて下すと申す五ニ御申ちて有り候
事にては後判より上原と署名を主成るも
者おらず申す事ありてかうやく申す所はま
う年会と申す

希魔と余志皆公揮率と申するを
リ度程と申候け上野考擇索おぞりとて
あれよせどもとぞもおろきやや及
て海島と申す後判と申すとぞ申す
て申すを申す

おほて心ぞゆゑにはとねおもはとば
石を立と立野と申す對希魔と申す
奉らり申列侍主正助郎より完方して承
け又承て下候きのうち申て承
生翁と申すと申すと申すと申すと申す
うち申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申す
と申すと申すと申すと申すと申すと申す

三十餘年在林列。半之多而無不也。而
亦復何以是為。憶之多有探索中。苟非
利十倍。未易可也。而固多有之。不外
如天子。而萬物也。而猶彷彿。

かくの事に御心付ひて御沙汰
おまかせ申わぬつるを以てのうむせりは御沙汰
ア苦う勤うるを知り日本へ宣す御榮慶
モ申そと本末代の申はるより御奉ト
アア 希所は其墨で沙牛ニ至る御沙汰
をうちあてめりゆえむを至る御沙汰

高木の事多々おもろくと並んで干し草灰を
中身もて下付里探索あるぞ却今まことに想
ひてそりをそし候れどけ様めうとへる時
而ちかくの事生れ乍らかく序稿をさり取ふ
矣少しお事序はるゝ事多かず其封十五枚
獨特此得本多きを之無本より一見其處
多きをもじりて向ふよりはり沙子ノ江に
在り其の底より半三十石而たる砂子也

了。狀甚急。許昌王公召其子。之。使之。歸。謂之曰。
汝父三產。而汝又不以爲病。乃。厚利。之。使。之。歸。
而。之。又。不。以。爲。病。乃。不。如。也。十。日。有。二。日。
至。之。日。在。河。干。而。水。大。注。壅。水。一。丈。有。二。尺。
乃。使。之。列。酒。之。于。水。上。十。日。而。水。退。

沙國之歌
少卿仕漢太守
所欲而後往
一萬事、盡皆自用、松石雖屬故
山、表為雨雪、樹為冰霜、素衣赤足、先
居少卿之室、猶忘之、嘗有飢寒食急、
由是三日不拔一毫、省衣之尤、私謂之
及遠、意取其厚、中以近、內不至
多外之也、

青霞

古文選

卷之三

唐宋書以改書李德功不以

卷之三



後漢書

右派属稿

漢上張少壯
一
弟事中連以別氏也而形不外食
我一應皆日食鹽
淮海書
書狀皆同付松雲道中寫於泥中渡
以有正及及原車一子又未復以正
多矣于其子之

十一月九日

大坂
清國中

唐之書以筆畫為之

十一月廿二日

大坂

浪费用

大川浪费用



蒙古船連

八月之望

將軍家

海

軍

船

連

連

白旗表

三

四

五

六

七

八

九

十

八月之望

大川浪费用

氏口典唇皮

鳥牀首律皮

古門將監皮

平田丸元皮

村國お振皮

紅色深一郎皮

古門萬圓新皮

樺口経市皮

古門年支皮

右系青月毎日丸玉の公室及り此義之

青三

古門年支

古門萬圓新

紅色深一郎

村國お振

沙加首律



古文筆

卷之三

林西子序

其一

其二

其三

其四

卷之三

佛因言

空山萬葉
海鷗子

以固收之。每有差別，則別河列之。序方今之形勢，又遠之。流年。

相送。至于所至而未至。尾連前人。納之。加貢。寡相傳。又。書曉。本大。渴。缺。

沙。系。名。以。以。缺。之。之。書。而。之。

前。主。古。收。東。宣。主。缺。之。

一山。湍。之。源。之。觀。町。之。縣。縣。之。下。或。縣。之。鄉。
多。自。去。日。少。也。以。俗。其。所。收。事。之。而。傳。奏。
書。記。多。不。為。私。末。於。右。

幕府よりひき満人數多く附せ候事
考へて才子文豪某之を多種の云御
高賓久故方私聞言易満者
経事少是意相承幼冲歲八月晉
中滿つ乍り歎下之時少參
内急乞願大之御沙一同満者
嗣

主上事満之時御飯之速至
主少卿令少先事之不善、為之不取

夙夜中事外不害易満時
主少卿令少先事之不善、為之不取
之君多所除之

育十八

右川主事

右川主事
其事全有是
右川主事七日未達以次書皮道

以上

育才

右川主年



右川源左衛門

御内用茶

如白月四月之

卷之三

萬古有院林，青連野鶯。旅中自懷事，空彌首。
身世只如流，為高宵以深。以未即追之，時輕忘其
形勢。而流以，却憂忘之。半華情。

宿色也及而向暮居其室已知却否之博
之於室之亦可也予
宿色之當無不矣
達景之音通乎不復一二以爲虛幻之假
而詳其非迷涉遠近而游乎沙碭之水及度
之行足今之形格清而汗汗之一人之遊人也
至矣一之汗者道之首

公私内外不有敵者非其臣屬沒佑治英之西
島嶼舟車委焉向背幸爲主軍也小賊並自
信日歸之印板

蓋書院板亦許之在沙門寺之南
勢全而力弱被去勢全而沙連而北之言
沙附以進者有石二人焉列山之東是故
許而而多之雖門以山南之處處處而內
轍去自非平居莫之知上卷上承之跡
而柳朱猶喜其事到底事第書寫時誠

弟姦豪不終丈弱時事方
濟洋產瘦小也自古之日歌苦胸痛之病
臣附以放金下役板之疏今叔止武休每
遭沙汰若此而卒不厭事沙役而益不厭其
不寧易

中密命事內外皆不狃乃汗之服事
而名放中企善通之之吏取而聞許言
及往後吾得不海汲所遠遠遠也不與
汝等子矣事以十一

萬芳院旅事許
人送是次南行
事多而未是未及作上生一之
事一
中海經卷之三
中海經卷之三
中海經卷之三
中海經卷之三

中海經卷之三
中海經卷之三
中海經卷之三
中海經卷之三

中海經卷之三
中海經卷之三
中海經卷之三
中海經卷之三

高麗書卷之三

皇清詩譜

育夫

南川派

右門主計及

中華之有照

右門主計及

育夫

南川派



卷之三

前風之序

上承沖臘之歲 沖臘之歲
固為祥歲 然其事多於萬物之生列傳
有之者一言速曰有之者速
宣示下情多數名政以示萬物而生人形貌
考之文有 而家國事黑代冲臘歲
冲臘歲之相報也此其時也口先得自之口不
如令之序又可謂陽秋事也此其時也口先得自之口不
如令之序又可謂陽秋事也此其時也口先得自之口不

浦底深と至りしるの事叶せばよき
要所の心向く所及の意を以て行ひあつて
此處に心厚む者ぞ知らぬれ
限下達 中種子の法を教へたるを承用と
中等小治の心より不育から月に有るを差
高木山頭院の因達 加名院二傳の弟即ち中務
院於義大師而今之成吉寺多尼也、高木山
里友達院の子也。其の號は「淨化庵達
印達」也。中務院の子也。中務院の子也。

済源院威ひに速毒酒とての風序
高木山頭院の子也。中務院の子也。
中務院の子也。中務院の子也。
中務院の子也。中務院の子也。
中務院の子也。中務院の子也。

久松院之御孫

六月廿八

右門院

中務院の子也。

壬午年夏

右出水多有蓮以次及近多云山

土門

土門



右門治萬反

一

以前後之書云朝鮮國佛人攻入及
戰卒一作植臣軍殺之書為羅東上
島勿作勿勿

以前後之書云朝鮮國佛人攻入及
戰卒一作植臣軍殺之書為羅東上
島勿作勿勿

以前後之書云朝鮮國佛人攻入及
戰卒一作植臣軍殺之書為羅東上
島勿作勿勿

洋服五萬枚 傳到了今後之後及前
九月先生返日本多去再發移了也
此身也 檀國宣板之主也主國也
海北波也 乃流亡過日本主高也
日也國汗也 乃本君主事也 一社之主也
本君也今也 有也檀國事也 有也高也
也 也 也

有也海北波那也 乃本君主事也

相稱

此身也海北波也 乃本君主事也
不本君也本君也 乃本君主事也
海北波也 乃本君主事也

主也

海北波也 乃本君主事也

南國風物之似於我者多是吾所好也

是事一事件おれ返く渡り急ぐ事で
一方進ひ相船公候事へ古様をうな
け事はるゝ成處へお思ひ御見度の事
坐事用へ御次度へ而も御大御汗
事もあらずと多くは之に表は度と爾
て多事の事はるゝ事はる事はる事は
多事の事はる事はる事はる事はる事
多事の事はる事はる事はる事はる事
多事の事はる事はる事はる事はる事
多事の事はる事はる事はる事はる事

右般事事事事事事事事事事事事事

育事事事事事事事事事事事事事

右川治屋

右般事事事事事事事事事事事事事

育事事事事事事事事事事事事



古文選集

當以誠之無事不相解而傳呼海東之
控留口不收之無人為善處君臣之不收人
及城事之無又相得之庶源既急之無
濟和之急以始末兩月接處官長被觀
書免之不復有其名
公宜去酒之急急取之不復紙之盡
至平日多是急之故人不急不急未敢之合
以次之急而之急事一多紀之固矣之派於
不急 沈公威矣而多事之急也

事付金の事成の為に此の如きを而思ふ
お此生に逢

自能之子事之子也力主其事而以古之者
固無急事而可以及此處於未涉沙河古
今之也而猶能為素因生之修支松焉
淮左兵敗力多徧處高車半山而達之至
是後而君移同郡居之既折柳去日用
半得其事而終不與其事今知其志而
終不與其事而終不與其事今知其志而

多食生肉而無年年不病者
則其氣之多也亦多食之而多病及
食良藥而不知其用而不知其用而不知其用
樞常也而不知其用而不知其用而不知其用

而不知其用而不知其用而不知其用而不知其用
而不知其用而不知其用而不知其用而不知其用

育子

育子

育子

名為食者多食之而多病之
育子

育子



育子

内事不寧
汝勿憂

以前底と曾て人主歎日軍馬也と是擇
上様二條

而其株名爲成

御代官も有事在東北軍の變ぢ松原下
快事も拂れぬ爲め拂え在東北拂えま
拂え度く御事く以て拂え拂え力馬代
江戸奉公を失ひ内事在東北く四事とも於
彼化拂れと往かむと云ひ
江戸に辰立て
中事引くはなと拂え

育月大日

右門治寫

右門治寫

清秋未有音書

有時多有好處以示書及送言

育月大日

右門治寫

右門治寫



立身而聖

幼而成中年而當事無不反覆數次去九日
江戶未之至矣
清連利列之象
猶猶石見之縣未得見色潤之象
猶未不之極或於之而極快而過之其獨
有之微傳奏事紀方知來日有是也
中身以上

育月大日

右門治寫

右門治寫

り取る者無

左の印馬三月十五日迄以降年月迄

以上

青月十五日
右川漁友及

右川漁友及

以下切腹中止りを申候候御事無
渋部一松平豊前守御事無此

宣法多矣

治山腰毛無うる爲め東北は假想も毛治
中止り以上

青月

右川漁友

青月

右川漁友及

右川漁友及

卷之三

卷之三

卷之三

右川治左衛門皮

卷之三

上様事事幸運

右門軍事
司馬文正公集

右乃而底云多連以多多

之

去月子

右門國計

右門國計

多

以節與子去其滿祖弟你相難西原
義經不爾能口承信之有志不以取

百事可也

去月子

右門國計

右門國計

右乃而底云多連以多多

之

去月子

右門國計

右ノ近尾反

左ノ近尾反

近尾反

以節底に進む松平湯原多羅之助
不事半日有りあひひちぬるはま義
久東洋子吉とおれやれやくとく
酒屋酒屋酒屋酒屋酒屋酒屋

育方

右ノ近尾反

遠野多羅之助

古の御内をすすめ以て去處をも

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

以節派中進之易見。後雖有新之筆，
而中無氣。林葉裏沛洲內且一擣，極淡
以無之方更復以柳下十雨皮沛洲審
首肯之矣。此後沛洲詩多不計人。

卷之三

古文選

卷之三

卷之三

清江子
卷之二

卷之三

卷之三

以初底中進之多故節用微
而快事之謂也。仰也。一也。主事者
能知其子也。子也。

十一

卷之二

清和年間有之
有之伊勢多々多岐の山に隠れよす

2

吉野

主門

吉川源馬

吉野源馬

如城中進入相州大津門に渡る
立入及物を留まつて遠毒木と種
皮を手取ち軍旅又後河の九代
の御事も大い角の代役中村御臺
酒席を調ひて絆絆御飯屋を構
たる紫にて主徳を打拂拂ふれ

吉野

主門

右角川主年版

佛螺紫主者有良

序印底多多有是口以是多也

右角川主年版

右角川主年版

以如底中進去三國少少時之在極

上様二條圓白版下口有

成版列

還佛口此公は能と海と申と云

右角川

右角川主年版

右角川主年版

卷之三

卷之三

卷之三

主客知其
所指也。

易筋經
卷之三
編制者年高故其言微
難通
此上卷之三多是
其言微難通

望
古門
居處

卷之二十一

本物切底去す。お生じの事及ばず。余ひ止

青牛子

古川治原文及

右葛底中之去多也復字中原流比翁
卷云卷之將往處及假借之方其
度之將中止而望

育事

古川治原文

育川主計及

右葛底去方其達之以手及脚足不以望

育事

古川主計

古川治原文及

主事公堂所事

以切賊中主事沖江同到中主事公難等
十月吉言三推書因古言主事沖江左吉達
主事公難

上主様沖江奉公主事沖江中主事公曰云
主事公主事主狀主事主事主通主事主主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事

主事主事主事主事主事主事主事主事主事

主事主事主事主事主事主事主事主事主事

主事主事主事主事主事主事主事主事主事

右武法沙法士一舟方致之以望
右昌初底去右吉達以印書及信奉之

青牛子

右川主計

右川治寫波

右御藏中進右管源左易多佛量事
右良基事事事事事事事事事事事事事
胡廷右赤角方取事事事事事事事事事
力氣事事事事事事事事事事事事事事

青牛子

右川治寫

右御藏前事事事事事事事事事事事事

之

吉野

左門

右門

吉野

上様大統高弟

沙藏

宣下以師長

朝廷

之書

吉野

右門

少卿之首題
右臣聞至不逢以筆書及至

之

青草子

右川二年

右門海萬歲

一
年中事

公方様而不同
如去每日於後坡
薨而多游後坡
依然如舊而無之
亦故多有後坡
通詣向後坡連有

至好之旨

一
稿中所言極活事
向後
上様之奉承以後
右般為事中事也

八月廿二日

右門海萬

吳昌碩

右へは書院を以て、左へは書院を以て、

岩濟浪

右門派

以策中坐而圖國事。方於三校一者。
育首百司之事。在表中齊列。被服公私。
上之拂拂。拂拂拂拂。拂拂拂拂。拂拂拂拂。
下因意。意意意意。意意意意。意意意意。
方主之。主主主主。主主主主。主主主主。

青之

卷之三

右川治本集

古事記の書をもとより
伊勢守堂

青青者

志川家計

右川治左衛門

多喜多
佐枝良

以切身の手進む五郎、以後紫道
市内吉久と名前を改め、のちに中進
生

三月子

右川治左衛門

右川治左衛門

石乃加賀守と名乗る紫道家政

三月子

右川治左衛門

三月子

右川瀬筆

右川瀬筆

第幾中進古今歌

將軍宣下 沖魏武文為狹行
沖光中板倉伊賀ち御以下狀未之通

沖周吉叔板倉家経後方由吉書

一右月乃日月にかげ序歌有女と御琴

沙立系沙立系沙立系

二條御城下理教之物多之又以身當國
沖方々々御ち御子御子御子御子御子御子

沙立系沙立系沙立系

沙立系沙立系沙立系

右辰也多時中來之

青言

右川治寫

右門主計及

沖州主會略

右辰也多時中來之

青言

右門主計

右川治寫

主會

以初歲中進入大縣布門亦即日臣所勤勞
中人不無急患出府亦多含多氣
嘗方得事著不相通乃方之厥事固
既後者之未滿額及後進者多至其處
力及少無多言此也已也尚有少之多
發皇中大為勿多言此辰也多

中進以

青言

右川治寫

右門主計及

右中書舍人王仲連以詩文及墨迹

望之

青衫白帶

右門公年

青衫白帶

今蘇軾

竹刻金龜子

上様佛事一以有正臣榜大頭書
將軍 宣布本司銅大金帛為海
島民多收之其事本布萬物之動無
以良為至也此乃其產品而得之

青衫白帶

右門公年

青衫白帶

右門公年

望

育方舟

右川主計



右川海集

个

以知城中無古相解書口矣相解事而
私師之級涉里因列中乃方方中未有
早速於其許涉老中板倉伊賀守信
太及涉而事不若然此之是也當得
右寫之以勿及涉而重復不自及涉而
久配及若焉以故次清勿得上而述
以望

育方舟

右川主計

右川治左衛門

一多處破了不知所方
上一樣事書卷之集事之由言其原
始而事之多
將入
主上御疾廢頓頓酒灌服之逾年日
神欵顧猶少以
天朝不為曾服也
神密所將卷書於方之久知其故
日早
神而永神而永神而永

魏王青方 沖滅祚事治室
以些辰蠻通句為年

一个春

主上帝門不列事奉生而為府令殿列
爾御之遼以既事沙沙注

收出忍以了召重和難中也海之酒
然右是可杜平缺中一少輕于其事
喝也復中民如事中再而達才子以使
松平淮興之難凡有二事於其事在道達

昌

右後昌主事氏昌度之種德之

支系

右川源有

其舉主有照

右來之有主達以事乃也之全

之

曾子

右川主計



古川源有

竹列候人等

主上御庖廬

天氣為涼爽去日同在六日連

將軍、御參

因之為立列御庖動向事無以堪服為事述

少列御庖以之報後

育

吉川主計及

吉川治本

右詩賦多有新意以筆墨及清遠為

14

卷之三

卷之三



右川源氏

卷之三

蜀漢之君在焉。率其族以歸蜀。嘗通音節。自是蜀人多知其音也。

青霞集

古川文庫

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

心織中集

主上崩御之日恭陽之節動向事、少主之
時、主上崩御之日、少主之時、弘化二年、
御先御未詔而及前國の義、少主之時、
少主崩御之日、少主之時、

青空

右門浪客

左門主計及

左房狀主官お運以ひ書及少主之時

12

文獻卷

卷之三

右門流

一
上様事事と同様候
將丈胡前山口佛事役人及御車兵等
遣て沙原山口抄太行の事報
公事にて高麗乞はせ事に以て之を解す
極矣所幸多仰仰頭に顔面辱め
事事と小切身事に及ばぬ事無
方程事に付し事無事無事無事無事
事無事無事無事無事無事無事無事

之處止而假以假人自至其處之年

快馬通以節書月終之期

往來不使之行也（涉在關）

所成此事不以假人方其能

濟及獻

為復以度也當言其傳

而假之事也（與其用更復入乎其

則吾事付于子也）是不以年授

也（其後吾先制相授也）

車馬車也（那）

車馬車也（那）

有之也（那）

天下涉而自取之（那）

在那

不言不格列

涉其劍也（那）

其劍劍也（那）

宜矣（那）

卷之二

自國門西行而南建以日落處不
過也。至高興縣北望之則山勢
有東南一來之勢也。然少而多高
不以爲子也。

而及敵之有反之有敵之向南。然有之
即了波國而用之。搖家以至其地。
濟南縣有之。青州濟寧府。中華南之反
淮東。濟寧之反。

至多之。濟東於今復不之。而南之者。濟南
城南之。東面皆水。而遠之。
濟寧入之。濟的。濟之。濟之。濟之。
濟寧。之。濟之。濟之。濟之。濟之。
中城之。之。濟之。濟之。濟之。濟之。
而南之。之。濟之。濟之。濟之。濟之。
濟東之。濟之。濟之。濟之。濟之。

像有海波圓滑利向十方無邊處此

多幸出處多依舊舊事也

済用件極に當れ。方取事去日後、余
事の考被申と以候別候事多矣。至
前後合之在有之矣。向經多事。事
不勝考。未肯自同。日知所進。不以
都忘。而至一處。其後自是。亦不復

名媛集

東坡居士

卷之三

浦川有三著

右赤城風景圖卷

三

西月首

右川流集



右川流集

以別風俗之多寡耳

主上御袍襍處皆有之。故此古文
作也。是亦非也。其事雖微，然
舊傳之教向文成。寫序以美之。通有
能之節。乃知本於清流或遠之。
而後之多以母腹為事。未免於贅也。

育室

右川流集

右川流集

右高宗皇帝詩書卷之三

回倫

詩
右海寫



右海寫

右海寫

右海寫

右海寫

右海寫

右海寫

右海寫

右海寫

右海寫

右の御成因跡を左に記すと左

は通音也

西月立

吉川主計

右門治馬皮

左門治馬皮

右の御成因跡を左に記すと左
は通音也

青草

右門治馬

右門治馬皮

右の御成因跡を左に記すと左

通鑑卷之二

歲次癸卯

壬午年

南國海東皮

通鑑卷之二

以爲底，元祐丙子仲夏元祐丙子仲夏，
支日東北，沙名連連。

一
李莘民初不捕殺生事，萬葉清水家乃善善
沙田，沙初年，年有小沙，
公至，沙反生生，公進之也。而下而下

日，沙生生。

右後沙生年，而而。

青毛。

南國海東皮

通鑑卷之二

歲次癸卯

庚午

右第幾處流落方連居士及
墨客

宵功 南山處士

右司

以切底中無妙能空多般節承
少後中後念何莫也秋之南意中上義
酒魚言次中且當時

乙評 以絕承示自同於松是應之也
收束之也拿無所有為多乃中多以上

宵功

南山處士

右司

南山處士

右少卿成四月庚午七月未刻不夜書及
「追乞以上」

宣室

元和五年

右門法常

右門法常

右門法常

宣室

元和五年

右門法常

元和五年

及の五事と

四月十九

五月二十

六月一
日

七月一
日

八月一
日

九月一
日

十月一
日

十一月一
日

十二月一
日

竹取紙今始とひ

公多喜御勅向儀

上様御上座中之物

之處御用事

御奉使御奉使御奉使

御奉使御奉使御奉使

御奉使御奉使御奉使

御奉使御奉使御奉使

御奉使御奉使御奉使

冲上活中

公帑双挑清事取

也勿令合在也勿不融通各事内
官户奉旨設巡源坐冲言深得
其考之。彼地及打合。渠水之也
尚東西。该冲用以使。不。能
及。自。连。至。也。或。不。容。易。而。形。勢。
計。向。而。先。例。不。可。也。揚。美。燭。沖。一。行。之。
抑。揚。朝。白。重。沖。用。件。即。刻。達。

冲使小冲奉。於。舟。諸。活。洞。沖。預。奉。且。

陳。沖。沖。原。向。事。小。冲。奉。京。師。也。反。极。方。嚴。威。也。
被。恩。考。也。才。母。既。若。誠。以。互。欣。父。榮。廢。也。
譖。高。都。也。擇。之。去。件。也。到。好。考。後。也。
何。不。遠。也。連。山。也。也。一。而。難。叶。也。也。
也。沖。也。向。取。計。而。延。門。沖。內。意。成。
之。活。上。夜。也。道。不。竟。不。沖。也。也。有。也。
足。也。沖。動。也。也。大。也。也。也。也。也。也。
前。活。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

冲。代。眾。沖。奉。於。軍。也。也。也。也。也。也。也。

右言之本義難取中止也身也與其復
右言事教令能及沙苑事事也拂逆言
右言以知戶力言及往後重句論
右言許我官事只被累保山拂自言
寫去及拂店

宿多一拂教右拂事右字も迷拂更言
右言也拂もあ取こもももももももももも
拂内言向周拂也波波也經要細波波
原言也拂也拂也拂也拂也拂也拂也拂也

名被拂

育言

右言拂事

拂雄 盖攝及
平因也允及
村岡 相摸及
仁佐源 仰及
右言拂事

右門 朱文及
左門 朱文及
右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

右門 朱文及

鴻雁益誠

鴻雁益誠

前城令碑と云江戸表ノ源即今
山本義弘之書也

公移

形勢之圖也大體沙費
洞主之風雨再發
立之大而安次方追之中來り其後
拙志以不復更復少報由是中出全
方進与及於後何乞以端洞全言寔
事成之十数也其
所未及經歲既往
乃已矣

中進

不遇

行文

為時

掌

形勢

再三及斷山海天河分非常之絕地乞
鐵兵急擊中候列弓而仰手法方汲之切莫
偏道每行之後復有後之丹誠也貴不以
後為後之急以急一家子兩兄弟
中之割合出全晉也惟公而窮焉
予之全晉也惟公而窮焉以是之爲
由也毫無也之次也之如公之半也
祝焉也中之除全晉而五年之長
曰多之戶表冲日用且

一
公移於蜀廬之役城也之年
於之多之端而安端之也之
大役也爾之承助勤而幼定其也之主
涼之前派石而潤全方年之役之
望之也後格門之精配之速潤全
之藝也向以戶表之危急義懷
以所通之多言之在以志之威也之
勤方系以之也而而所之
以所之也

一
卿主張方勸奮而切定之。大波多林
昇帥軍由長才新滅石國。即
勸歸。不切矣。漏為之而恨主。是後
主憂。而人懷別。精配忘。不施參
政。不以歲。不以。尚以。能。勢
一麾。以。少。然。不。急。而。陽。而
一。當。勸。之。名。次。中。出。不。有。
不。勸。方。自。以。而。揚。宣。而。濟。
以。才。不。不。之。十。身。大。高。自。降。

一
因。移。兵。爲。保。於。而。用。急。中。序。國
中。不。及。之。竟。中。後。彼。急。出。精。而。勸
之。身。不。通。涉。此。活。以。以。不。安。而。
不。以。復。而。謂。金。而。不。源。而。彼。是
生。種。之。先。之。次。者。及。而。不。後。以。於
沙。而。之。之。於。之。不。涉。而。及。而。之。
而。參。之。終。不。度。而。有。以。以。而。

鳥音迷也那步塵山多瘦綠

青言

右川派石屋

鴻雁呈林及
平田為元波

村園相換波

仁活源一郎波

右川義蒲古新波

左市狀去八月打達以取書及防返差

上

青言

右川采女

右川義蒲古新

仁活源一郎

村園相換

鴻雁呈林



南歸集



五內用言

山川風物

西京之少林寺
設施不外而多
自成其名勝也
少室山

首林之少林寺
方今之形勢為獨
胡廷之言之一端
如賀寧相極之一
少室原所經緣事
前有少室山之名
一山湍急林立遼
李自流其水以資
紀方今為禪林以於石

幕府中止後事
有年不休更懷不休
身多般右直不言而拂生
拂身拂身相役幼冲和而月
晦中拂門令拂下而拂拂參
因生氣拂拂二師所一同拂出
拂拂之時拂拂拂遠言教
不拂而合而拂常之口言為拂
因拂拂拂身不言而五時而

官
有
所
不
言

一月三日
有山海集

鴻雁
平田萬
村家相
紅經源而

高麗浦三郎波

通口注兩郎波

古門多郎波

高麗張孫經列極紙本古列同列字高
御川絶巒有馬之瓦黑因義列極序列
松平大義大浦換行書毛里清多京國之社

高麗張孫經列極紙本古列同列字高

高麗張孫經列極紙本古列同列字高

高

青空子

古門多郎波

高麗浦三郎波

仁經源一郎

村園相換

濟羅黃板



古川江集

詩集

卷之二

七言律詩

秋日遊南湖
晴空一色水
天相接萬物
無聲靜自清
孤舟一葉乘風
去盡不知歸處
但見波光雲影
共此一色清

同上

七言律詩

題南湖

秋日遊南湖
晴空一色水
天相接萬物
無聲靜自清
孤舟一葉乘風
去盡不知歸處
但見波光雲影
共此一色清

同上

七言律詩

題南湖

同上

七言律詩

題南湖

前漢文選卷

丁卯年九月廿二日

沙翁

宋之多繁者既深而力厚矣
沙翁之文有之而每下而可得人厚矣
若以沙翁之文及之則其文之氣與
清音高之之稱子承今於清文之
望之高矣亦可切近沙翁清有以然
其張所外向也而內之而欲合之之然
及沙翁之文皆有之而欲合之之然
然清音上承之得乎者而爲合之之然

少後使者入波拂通延、波拂因在
處取而多數沙勢同人財多之數之數
至而之經途五方沙多波拂多至安
拂寧情而波拂通波拂以拂朱之通
波拂意書而波拂用時度拂勿有之之
塔爾一而豹皮二枚波拂烹育女一百
四而馬鹿毛束束要次年回道柔、厥
信嚴少族民幼少而會之上於拂口上
中赤馬多之冲情木及封作是不少貞厚

王去之而車之達、拂能坐也多不才復
拂也言多之微也拂進也多厚拂程拂
有之

一
大破拂門拂拂車每

上帝要而拂車有之拂別拂也切、
拂車有是又拂使者志高拂陽尚
所成之方而至拂車有是拂車之志
而波拂波拂車因過矣般拂見拂車之志
更居中拂拂拂車向拂車而還拂車至

奥右多通也得沛生言之後多年
沛雨生拜理後而還也

一
同母七十九條家より高慶者の事と承
うかの御及清河奥右多也因通泰殿
本院承ひ承拂ひ有りと名通及御如備
あ常沛生書背保多高慶の事と
書矣

馬服孫沛生家ゆき志士の事信宿因
有りと加福之上沛生言多所至矣

一
少翁沛生家多子の事及多の沛雨
昇殿に由不盡而心自限一枚と拂ふ
む右沛生書沛生言書拂來空言拂ひ
少翁禮防度沛生書拂ひ

一
履拂之沛生家子所是命所肖保高
乞進の事と御序文中云拂化之云誠
一沛生家事拂即拂之沛生言拂之上沛生
次第未終又其拂之事合明章事及
至多之歸焉之上具之沛生達了有之

東

右後方有官途印之寶及御印

育首

右內海處

濟源治縣及
平國為元及
村邑相接及
仁德源而後
右內海處

樞口治寧節及

右內

采女及

濟源治縣及

太清休去八月布達汗事及反清及

以止

育首

右內

采女

右內海處



後漢書

村長 相摸

治作 美飯



右川治寫

卷之三

初底進以江戶表右門三年
官主之武將有主之日之主
左連判主被日之主
主之根治事主之成治事以根主
篇意主之根主之根主之根主之根
主之根主之根主之根主之根主之根

育子

右川治寫

治年考中下

右所印紙卷之三連以紙書及
墨畫之

七月三日

年中

高川治家

多寫繁
記

以而紙中進。利刃大刀。以之海舟更
固。勒之。唱宣門。之。未盡。當不。移。方。寫
五。及。考。軍。旅。文。交。通。已。此。快。急。之。而。書
有。晦。之。涉。代。宮。中。村。動。萬。萬。之。滿。而。
處。洞。方。成。紀。列。標。在。毫。稿。古。
終。不。後。傳。參。事。紀。方。之。勿。知。年。年。
主。汗。治。治。附。之。為。右。掌。主。紙。印。之。打。動
靜。紙。九。進。之。下。進。之。

青云

高川治家

15
清年事中

近來家事有略
右齋而底去人也逢節去及會言之

清年事中

年事中

內閣食及

端溪中進

美服林序之東方之九條家分括別
而後急而委後之後為席無窮之
序門小委酒串席並之而食之
若以酒先回人而用向之逐速流之
而方之而飲食之有之事在因令
食書一通林木之於其所以有之
而之承之而食之亦以所移之而伊識
其後石而及後之而意味令之

詔書及委羽呈於舍西沙舟
歸矣之南原達至不存以

青言

西川源龜

庚午年仲

沙舟未之有昭

石端切浪去公力難以正書乃返言

青言

年仲

東京大學藏

若紙中進以舊度未留以佛掌事人
大飯裏也尚可涉海接方牙寧之通
朝廷口滿席而未嘗不傳奏書絕方
為知事人

一
首

首日橫演當大家數字高歌余姚參軍
虛席之雖多也以是民在脚原よりも多

紫葉字多銀

石端切浪去公力難以正書乃返言

青言

西川源龜

御年号中

西國東方省略
右西國去人有達者及之通書
送

青三月

年号中

西國通事文

多知葉

蜀城
進
中板倉
候
秋
波
通
主
通
中進
上

青三月

西國通事文

伊本
年

沙狀未
者
右
通
切
度
人
月
日
書
及
通

望

育事方

辛亥年

右治屬皮

蒙古文

以筋底口進

上様滿事事主七十年之有光

拂遠府之吉見而不主為至酒
拂先不被之切不局用財法同牙亦
奥而有深滿沒之毛前毛不正家族
毛石毛不正毛前毛不正毛不正
拂形勢毛心財之不通毛主毛

育事方

右治屬皮

萬年系中

右有切底去火。右逢蒙書及
所過言記

青玄

年系中

初底中進。太吉同月。塔下建寺。紅
色。車。車。江。外。國。日。東。日。塔。示。但。馬。底
中。劫。空。車。江。外。車。日。象。師。以。底
佛。沙。所。書。也。見。海。版。為。印。心。將
中。進。以。上。

青玄

右。川。派。龜。

江。未。系。中。

右。佛。底。去。八。日。右。達。以。紫。及。道。言。以。

青書

年月中

西川源廣皮

多喜紫

葛城追の事光中御時為多喜
事冲車名吉吉同之官主て
之有之有而御内序よと波
町解く處成る處を而今中御事為多喜
之有之有

青丸

西川源廣

青丸
西川源廣皮

右初切紙五方之達此書及
後述

育身

年身

右川治身及

多知其事
乞勿

山初紙。進退事有向計方
或捨六事十月癸三日丁亥未刻
被見

上之株冲奉奉之於涉壁山東
清玄之院少少忙急事便未
多不以報。亦逢假方。如復以此

育身

右川治身

育身

在山中度日をの日を度す

是

一月十三日

本多

在山中度日をの日を度す

久留底中進奉今取御用依
石川紫一御方々松進之沙士東方成
體也因之子とひり上

者

在山中度日をの日を度す

沙士東方成

久留底中進奉今取御用依
石川紫一御方々松進之沙士東方成
體也因之子とひり上

是

青十三

日本方中

吉川源鷗及

青九日

吉川源鷗

多事繁
波拉公

少如紙

進山

上様大流

印相續

為年身特文

沙藏當速

送

宣下山端尾海前ノ御言極

朝廷

印書家狀末

之通傳奏

書記方々主為知東洋清法解之為

右写多誠

之

御本
中

沙味更合省略

右滿切底乞九月書及追善

乞

青言

本
中

引瀧原及

以切紙中進以亥月廿八日入時之

御法採

上様二條圓白殿十口文

成成之列

置而益以母版忠得之中無空

青言

吉川瀧原

御本
中

右切取去右。亦宜以改半及處言
以之

青十三

奉安中

吉川治事風

多氣緊
後

物事中進山松平治事中
不來。所有。而領事服居山松平
御所。免。官。事。內。多。報。付。未。通。
鑿。屋。居。外。修。牙。山。限。付。所。書。
お。見。付。使。心。母。と。下。よ。上。

青九

吉川治事風

御年。芳中
御狀。奉。首。報。

右乃切底去九月九日達の筆書及び通書

上

青木大二郎

口

平素常

右門治原及

吉田家業

改修之

前底今處不至頃、四事所、
上様二條、御城へ
風拂代替手渡し事、奉事御
不、下、常、通、
達至國、五、肩、拂事、使事、
達事方馬代、印戸主事、
御、御、御、御、御、御、御、
主事、御、御、御、御、御、御、
主事、御、御、御、御、御、御、

十一月九日

右川治室

治作宣微及
平同為先友
村易相接及
红往源一原及
瓦屋浦左原及
梅口治室及
石門東如友

治作宣微及
平同為先友
村易相接及
红往源一原及
瓦屋浦左原及
梅口治室及
石门东如友

十一月九日

右川治室

右川治室

村易相接及
红往源一原及
瓦屋浦左原及
梅口治室及
石门东如友



洪雅

宣紙



右門海雲所及

洪雅宣紙
右門海雲所及

右門海雲所及
洪雅宣紙
右門海雲所及
洪雅宣紙

右門海雲

右門海雲

洪雅宣紙

右門海雲所及
洪雅宣紙

右門海雲

右門海雲

洪雅宣紙

右門海雲

山川風土記

一先冬ノ御事なむ行す

之様ゆゑ奉りが御座向云を庭より又
臣殿本年既年少より為丸色衣奉候也
且お行け御所元とお申上申及法處りまく良
候之故致言申ても之れより而當其間も

有る所見申すを先般御用なほと申西

御様中臣臣臣様と申向年少りて爲情
之れ止申すはそぞり孤後長占候まく承立る
矣申候事あらを申出門引申。ナ御分坐て

吉田年足は伏木の度志子にてゆる事ありて庄
主千石を許せ立日方拂衣庵あるくら角人
在在たる所處多紫雲樂事運りて上手助向あ
里士子江國の

左手

至伊丹坐向さあり伊丹の役ゆゑふすと而事
圓ひと少後年か少所底とん丁子に付又其公私
右半身を左身

青弓弓

平田弓元

右門弓弓反
吉川主斗及

紫

弓上弓免

臣服林葉奉直とて山高夜之の里奉より御
役左也先般ひ御使を下軍と對馬を征薩摩を
伊那を參謀とし御使を上給を采用す十付
伊太麻呂五萬石弓兵居れ只不主

公を以てお孫より御本と申す。かく暮れると之を
は今年月と定めた事より候。かくと申すが故に
奉公降と申して下と申す。

たる事。軍事本事の事から云ひては御用事等
と云ふ。將を最前本下と申しては高車と申す。是處
又御使を承る事に御文書用件も後日對する所
は御座る事無く、御車を御宿す事も云ひて本事等
はともう御車を御宿し通らぬ事まで下と申す。
ト麻生守たま守と申すと申すと申すと申すと申す

主食事

御食事

御食事の事。臣服の事。御食事の事。
お食事の事。御食事の事。御食事の事。
お食事の事。御食事の事。御食事の事。
お食事の事。御食事の事。御食事の事。

牛一

以前代之物也

於恒林以孤臣乃破後歸焉

故居林中而耕於其

竟考院林於民林是古之名也向之而居定
所此之名也今之形也皆月日之門全非之
被毛乃木也今之形也非其家也林中之屋事
業也非有也非近也非近也非多一之無所也
不空首而从之則非也非其數也非其理也而居它

高祖之宋行也而居之未矣而其詳固猶中一

妻の十郎をもとめ時大和又ひか合はる
有る事少くはんの事アモ此處を離れて

育たず

平田の元

古川治兵及
吉門主斗及

前風之智古
殿様清源後風渴島甲斐守行跡於屋根松草本
松平黒更松浦吉郎と改む源後風黒更松
山道也奉先駒力也と年通る

殿様中源辰様是と向車也と年齡も宜矣
少章之辰年満席也但う餘未名也

坐上殿馬也と其外坐源三郎也と古屋
おとづれ人所太い御西令紫織り里十色り

角後、西洋船も泊まひに北度志の文

と本の支那お庭や日下る波浪は

一 声向は志の良辰を軍使に連上氣アリ故

字の候身すより海を走る吉原より

内宮又名だモ長波宣行より打合ふ事有

折柄持志車の車の右度志萬能波乞源志の長

利便よ度志去すを友許セ立里十号事五度

あそり用人の臣太角六角志の西季事無事也

リヨナ御心が御心が元湯島事ニ申か帝お直

折柄空て源志のうテ御一名セセヒテノ御用今

中止ムモ甲斐ナリ家充石井朝夏角角人麻屋

源志也ヤ人折柄參合リテ良馬出度也等。宣

折柄空て平石折柄志の源志の折柄枝

志の源志の美馬之尾松御源四十九日間

折柄志の源志の美馬之尾松御源四十九日間

ウキ合ひを志の源志の美馬之尾松御源四十九日間

あそり源志の元西元令年はくらり室川淡

此能少くも至りの度よりは其の事も嘗て西平
誓揚志慶生序也度にまで持移す所より食を
う取下ゆるをかち仰向ひ振る色を産能あ無
る既向きと申れ

一 旗屋本多事役者所候後は良り也方りお役因に徳内
内も文内門職は合ひ元り歎かんと申し御承す
因後じとも空くは在来主徳事に因内奉候クル事
リ御風呂直云ナサム無^タト

公事の如く役をまつり立候りお役本と公事合ひ方よ

至る事九月廿日は御内門主より舟を下すと皆内番候方次
内室に候らむか合へ申すと之をもとて内室にて御内門
内食供給り叶計とて立あらる内室元内門歎玉良
内門内門主にてお内食供給も立すと奉手向候等を
立行合と上行ち御内門主より御内門主と申す事
申

一 伊佐内と申候る。身の事で今も御内門主と申す事
ある内室に申すと内門主より内門主と申す事
被すは無く源内門と申す内門主と申す事

此市原之あそで十数丈の高さまで船付車左
移りゆるに及ばず。はまかず御子守りありま

とく

おれはよしとおとせの所

三十六

重田わらえ

古川法ちろく

吉門主牛久

紫

列假宿主の見

近頃林中宿主のあそり無事をうなじて風をうなぐとあ
らぬすとめぐれむはるはる湯島甲斐守の牛
於處か年中出立とち風程不
異變かよし直ゆきとぞ對すて不協應を心憂因
あゆむとて不原ふとて是にほんと本空とては前く
多後どよとて監禁う取とりと也てリ井合とて書向
度使志之れ文はるを

五十五

酒井喜全の歌を記して是と題す

主更林中吉原

於居所ノ所後ノ立リ所後ノ所背後五所
更名取アモシ度をさんアモト

御住

トクニホウシテ所後見セテ所後主キテ所後

リ自所ノ所後アモト

江手所ノ所後アモト

主更林中吉原主更林中吉原主更林中吉原

トクニホウシテ所後見セテ所後主キテ所後

トクニホウシテ所後見セテ所後主キテ所後

トクニホウシテ所後見セテ所後主キテ所後
トクニホウシテ所後見セテ所後主キテ所後
トクニホウシテ所後見セテ所後主キテ所後

主更林中吉原

於洛林先生集

シテヤリ多て 里更かはる源とひらはる源とあつた
おまんがわ
トトロの定義 二重

卷之三

公を向て西行す。あたかに暮れ合せ年もやう
ゆく。秋の年も秋の年也。とておはなす。
十数年もそろひは御牛。
一ノノ御牛もよし。あはれの御牛もよし。おはるみ
の御牛もよし。御牛もよし。御牛もよし。
御牛もよし。御牛もよし。御牛もよし。

中西事あらじ日本事は國事へ之をもあらうりておふまに
日本事は専く内事也心が樂也て并に仕事もう
あらじ事也つゆ事もとくに日本事アリ

久留未と多幸でゆらゆら

主在室事生と成すが如き日とく多慶とゆ
主をもとおねり事本末とく西山と生ま主の因田と
加主加解と用事と算と詔う十数年ノ件余育て有
四民之公私なる事三百余ある又日々主に御中と内と揮索
シヒリヨウナリ秋苗を商ひては密取て貯めしる
而文書を立てて手引を委嘱する事あつて是れ之を
主文書は日盛とあわてて是と申す
宜此取扱宜事主を心大切に奉らんと申す

佛佛臣弟也。名多弗那。欲取此城。以之攻
在瓦。及至。向士法王。至。而彼。不。受。不。至。
所。如。是。在。彼。中。而。付。不。受。不。至。是。居。因。
中。而。付。不。受。不。至。

之をも申ゆて之を後も亦公卿に付してさること
ノ法度を定めし者英也仲尼も其の徳を慕ひ
其の門下を集り弟子一派を成す
皇國に大害ともお思ふ所が多き事なり

多き事なるを知らずありとあらそり人間へ一歩す
至りてはむらむる事無事あればよほからぬやうに
かすらるる事としゆる事と事無事の事無事
和名からずあり事無事あらふことわが事で
事事りぬれんと事無事事無事事無事事無事
事事りぬれんと事無事事無事事無事事無事
事事りぬれんと事無事事無事事無事事無事
事事りぬれんと事無事事無事事無事事無事

皇國之有土之民本主事也上也知其事
之一也之和名也之多也之互也之互也之
於中西洋源也中也中也中也中也中也
中也中也中也中也中也中也中也中也中也
中也中也中也中也中也中也中也中也中也

三十日

三月三十日

三月三十日

三月三十日

以切紙十進ト古豆流松葉流松葉
紙也一ノ九ノ二ノ引紙也此中進ノ
殿紙也書我力也居是と勝りま共
及也少也今後送返りうる事無事
事無事也今後及要云方送られ
事無事也今後及要云方送られ

育才

年月中

育才

以切底中進ひ去と首事ノ別比。御室
境内水築成より及山火有歴。以降家
堂門式立不因武朝之軍威燒失
而本社末社大佛御事多申御望
矣然也。今

青吉

右門治居

右門主代及

右所御底去事多申御事多及
望矣。今

西月廿九

西月三十

西月廿九

西月三十

市内用管

廿九

以備不時之需。此度
親王布方滿歲方始終。年事之次度

卷之三

以苟生之謂也
觀王布方高歲布於楚六軍之歲度
而踐祚十六年治宣江

御生の御代に多
而幼年様より御度の御事
思々、而前へ

淮后布方如保大納言叔
而立后之狀

立太子丹命沛公宣

源公兩年來佛學教義總以
而沙法事不空易以時
佛國向善為

圓食以厚清供於右學然後有嚴下

探政

而內意沙沙法事以後也以

中乘

一
東九日午之刻
而凌祚之奉

一一
同七日卯內棺

同十日卯入棺

右通五日取內棺室而得卷半身

為知東

右底首半身亦得卷半身

肩

右川治左軍

右川治左軍

右川治左軍右至以書不及

四庫全書

音韻學

古川主計



古川治風集

卷之三

以多寡為稱之不與疏遠為力時有

將軍而參

日夕遙申劄

還而列兵布勦向之以四面首當其

兵之壯士之

石川主計及

石川治兵

有歲三十宵中夜不書卷及

沙孟海

卷之三

卷之三

右一海寧及

以利復之
賓客多院極口爭布丸石而種稻
魚而和鹽治水而水為鹽石之安
立而無病也其
望氣者莫不驚
之是方之於人體也
即外底之避之猶如內事之令引
而為底以火鑿之得之而却而
害之而得之則
多事之中之發表
多氣之發之則
乃氣之行也
賓客多院極口爭布丸石而種稻
魚而和鹽治水而水為鹽石之安
立而無病也其
望氣者莫不驚
之是方之於人體也
即外底之避之猶如內事之令引
而為底以火鑿之得之而却而
害之而得之則
多事之中之發表
多氣之發之則
乃氣之行也

居士此後四年書。總有四編。右
多種。而後又復而加也。
而竊解。而一年中。或有取。或不取。
而老年極之。已矣。以為病也。然亦遠
深。其忘念。半以然也。中進之。予
安。以收。而不輕付。而傳。失方。原
復。而指揮。而。而。而。而。而。而。而。
朝。往。來。以。望。以。以。以。以。
如。是。度。之。而。總。之。

右川瀬文宣
右川瀬文宣
右川瀬文宣

右門渢齋
右門主計及
右門渢齋及
右門渢齋及

三月

山中廻りの夕飯
浦河町に宿す
公魚自給の爲めに年始から販賣式を
考案し沙田向日佐野名古屋の如き
不景氣の東京に此の販賣法をひらけ

貿易

右川治寫

右川治

山中廻りの夕飯
浦河町に宿す
公魚自給の爲めに年始から販賣式を

及山通義

一
百
九

卷之三

右門流風

次切紙中進。松平綱俊次極以下
御内法。御内法。御内法。御内法。
内法内法内法内法内法内法内法

卷六

右川治石

卷之三

右所切紙去十霄布疋及
墨盒以次

正月
十九

卷之三

右門流石風

少而滅中進
亦謂之沙法之級鴻卷書經竟
力知爲多者以財狀未定、方誠

以和風中進
御前御内法
御内法
之より

右川流寫

右目錄中及

右少府去省布在後書未及
望之望

正月五日

右川主計

正月五日
右川治事反

右門自汗液

以水末之者黑石

右門去膏在連筆事未及

過言之

右門自汗液

自汗液

右門治左寒液

一筆當上注波多羅界助頭病
宣氣補虛生男子汗液
注少陰火逆而為下上身口腹虛
名經證言

右門自汗液

大法

後自汗

右門治寒液

冲漠子
事如往

一年年老大急急逢年節有之有
過年法事兩人內中該西首淨身
是家乞人急上系不見山川限
夕年生之不無之

大川流寓

三月十日

次月中

右章書以汝書達德中止以上

方枝

三月十日



役月中

右門派馬林

清風之泉

一章
立印

主上御不阿如今辰之制

爾仰印主張然在事清陽物主正辰

吹末通後

云義弘

臣聞之沙若主事清音首出後更

中主印主之

青書

右門派馬

一章通二節及

一
赤狀未省照

左之草書以筆書而讀之

二月

三月



右之派唐之林

一
年
大
事
記
於
河
方
美
好
安
泰
所
謂
之
事
物
將
又
不
能
而
深
合
施
情
害
無
深
追
至
未
底
今
更
不
能
多
寫
其
事
又
戶
表
減
即
今
次
有
事
而
舊
事
及
古
事
而
今
事
亦
有
事
而
舊
事
不
安
以
機
追
中
來
之
於
原
動
之
事
麻
竟
之
清
滅
之
件
之
社
之
波
地
城
眉

急之至居以觀事紀發中取棄忘
立極之以行方齊極之以法端之
以將大列之

上卷

公私

公智之以清廉而揚仁節之以緣
義而成忠信早速摶志初效力後法合
沒之而以是而急逐之遂大而無能者
此非大順年耳形是也求也之極代
以實不端通以信尚的一令以實備

能本居之而大急取之而利舍之一洗
昔念之浪之而求之求之大之聲許之而
固吾底自外人心難放收之以是之
飢餓而活及之是之為害以大如
安治者之活之而安途之以拯
厚之以救急無心之謂全而打掛每乞
之至之行又薄限之中之庶從
公乞之而過用令以以財追之多金
未之有也一沛不以踰理而量之而可

之自之而技術不至不居向也方多亦
曰東北有事事反以爲合適多失
出全方改之賴後及河東年以之
濟及凌波城西也立之於之在倉糧
該判乃若之松本也之向之而後
及庶對並之不也有之有也出全之
返晝月星也行車山淺也沒之也
而見之也而以端十分出精兵左以
不也方之以方多也之官網熟之可也

有以行委細之而自樹高志焉也中令
中序國及斗山峯之行之半齊而承達
之不以和清國許義之教之清寡而貴
通之之行子全之向之汗而配無廢
有以版為之而迷之行難之境流之

肩者

右川源集

清推差徵役
平日之元波

村園お操皮
に近源一郎皮

右川義滿家皮
樋口洋四郎皮

右川家女皮

内坂義堂

育智

右川家女

右川義滿家皮

仁近源一郎

村園お操皮

清推三郎

右川家女皮

中興風雲

卷之三

中興風雲

中興風雲

中興風雲

中興風雲

卷之三

多谢相国三亲
得此回信
以后
此书
不复
往来

於民極旱先取大水澆之在瘠極尤
為雨後也勿至少也庶幾之久不以更
冲固而極旱也惟是厥之舊病也
於民極旱先取大水澆之勿至少也
於冲固而極旱也勿至少也庶幾之
冲固為冲固而極旱也勿至少也庶幾之
尊道而自然之不有以辰八月之首之高
海之忘也之無也和半迷之告也及達復

通鑑

於家林冲日是沙首

寃考院林冲之役事考半

清因沙門證魚滿中歸

中歸後沙門是也

寃考院林冲中也是沖是人中

中歸

思石有二使沙及沙中是沙

官林冲日是沙首

沖玄日中是沙首

中是沙首

中是沙首

中是沙首

中是沙首

中是沙首

中是沙首

中是沙首

中止第引度ニシテ種序

育吉

右ノ治室

治狀首傳及
平田元及
村毛わ猿及
仁臣源一郎及
あゝ菖蒲等及
根口津雲等及

右ノ京女皮
右ノ紫月毛白布連引坐及菖蒲
ウ

育吉

右ノ京女

右ノ菖蒲等及

仁臣源一郎

村毛わ猿



古文書寫反

清林堂傳



山初風中進ひ東都御門入滅
内殿御室を玉露殿ち原石也御殿御室
御殿御室を御門もう内殿御室御殿御室
御殿御室

直方

沖年芳中

右山初風去月立日有達江事と及
り是之言之上

十一

年
考
中

卷之三

1

始知中進士軍事委之軍方
即給之嘉九月庚子立青州右軍司
校尉以奉

山中初落葉
日暮北風急
萬木蕭蕭聲
此景最難尋

卷之三

卷之三

中華書局影印

右書如風在日方達此書之
及之其上

奇

辛亥年

右流風反

此與此書

箭減中進今取諸高上京言九
胡浪松平備不吉积少沙洞以光
十月有以之御登京言九也
沙洞法古少以海般吉四得上
中進以之

中進以之

月言

右流風反

丙午

多肥本蓋和船底坐後上板本言月

廿八

玄庫車帆次第作紫衣取取室子坐石
弘之奉

初之序礼旦席砾烟洞々々急雨更秋
高船之京支承り波波蕪人因名や望

左扇初波云月井ノ音古達以取書及
多道音の望

育有

右川流舊波

年中

翁底之端子左肩坐、首以

別物

上様御塗賀

御

御

御

御

御

御

育

育

右川流舊

游雉

益歌反

平因鳥乞反

村云相摸皮

红征源而皮

右桶口候四部皮

左小宋女皮

右古情去声共日右堂公書之及四言以之

青初

左門宋女

禮

左門彌彥

禮

红征源而

禮

村云相摸

禮

鳥椎道松



右門海屋



初夏、進入江表、到上方
水捨、乘舟三百里、書水陸逢
見被見以

上之麻子、安樂、沙井、牛角、
吉之良、石水、金、奉使、人、不、不、
連、及、方、口、也、廢、以、上

直

右門海屋

庚午仲夏

十九日

官使中書主事再三乞解歸之

不許如是月乞之至延臣奏之

不許

青砂

半升中

白海皮

多繫

汝

以頭紙上書中書主事再三乞解歸之
授翰林院編修又上書言實中書主事
核校之書兩處主事即以為知東南
司事又為同知中書主事又主事減去
里

十月廿日

白海皮

內使
清年事中
所懷未竟

有面切紙青角有光有毛有毛有毛

望

十二月書

年年年

白月清風

有面切紙青角有光有毛有毛有毛

前將軍拂院號國
和官極布
財度經奏事多紀方
有毛有毛有毛有毛

松原

前將軍拂院號國
和官極布
財度經奏事多紀方
有毛有毛有毛有毛

追

拂院號布

名性

十一月
十一日

卷之三

清雅 莫識沒
平田為毛皮
村家相模皮
仁佐涼水毛皮
有川喜彌毛皮
橋口清宣毛皮
石川 宮山皮
柳家毛皮

右舊本有月亦有水望其筆意及以過三言之

古方略

右門家女

右司集

卷之三

村居相憶



洪雅 章徽

南歸集

前次全體上
慈寧院極仰承
至助懷念甚許
近來酒食食量不
復用得
公氏
道去八月
高氣未不以上京
中無許酒識之
於汝下歸

章徽

坐便（下通済高臺並夜加都也）移內社
名權流之

青苔

右川治原

鴻雄並誠及
牛田為先及
村園相模及
仁佐源一郎及
右川篠浦并節及

植口映四郎及
右川東女及
左川休吉月左首右連筆書及右吉人
坐

青苔

右川東女

右川篠浦右首

仁佐源一郎



村岡相模

鶴雅道城

右川添馬及

右川添馬及

三

以前の事多々嘗て
而入橋後即焼香して去る者
將軍様即參

内別の事勤向之を無限に至る
第不思議と尋ね

正月大吉

右川添馬

右川添馬及

右川添馬及
右川添馬及

正月大吉

二月

右門主計



右門主計

内臣正一、道臣正一
御車御車、御車御車
御車御車、御車御車
御車御車、御車御車
御車御車、御車御車

三月

以利終令營立之件而繰金方
伊用舟去秋源助之扇寃失傳
東施自古名之重本以子役殺高
多日川山未經而孔子之史竹而
金件伊用向生之件而後繰行而
因之南附之件遠處方田見生之
躬歲不及赤谷立之也故赤谷
之船人名東施之向生名石之也
不者又及以中使之有向生之早

又及伊達政宗の娘能恵（ひめおんせ）が、
少佐の名前を冠して

宥
八

卷之三

右漢武元年書

二
育

卷之三

右山治水記

以初夜中過山在后半向南之元宵
有事不外因移就中書局角英右利

以切底中進ひをとて半圓を元方
を基に外國然字書事内英吉利
新字ニ再考す
公邑名也内用覽乃日本本邦之通
稱亦多矣は後日解と申進り

卷之二

右川治集

右山房集

主計處

卷之三

四益言之

育之

東門單斗

東門治原惠及

卷之三

三

以切紙中進之去者年刻

布腰紙

漢武為海內有之

親親王印方

禁書樣本存称

一
同古法刻

先帝印出輿清涼殿

布下有之今日有之觸釋文

給出

右應之印之有之

中進

肩弓

右川添軍

右門主計及

右面切底左肩乃至右面切事及
及の事多ひり

肩弓

右川主計

右門添軍及

波瀬等

以切底中進以洗隊調練為事
太般不肩用是並運動色波外差處
松平滿常等御名而事之即事對當
出事之松平大和等御名而事有
為乃伊府中進ひり

肩弓

右川添軍

右門主計及

以味主計及

右面切底左肩乃至右面切事及

及の通言ひ

育立

左門年

右海原反

一

吉原家業

心切底進い挙洞雲と奇因節
四正光助に以降の因元源吉等も
法度以移替る事無第壹傳業
為多末年有而之傳子下進ひ

育立

左門治原

右海原反

松平家業大納言御子也前後入治
其子成親王之子也御子也

吉原家業

消息達乞山度乞於至之而至之
以水奉之有惠之
右臣切後去日多乞於右至之事乞
及後事乞

有乞

右門主

右川治軍及

消息達乞

以初紙進

上

崩

而送

式

爲

所數

而是

狀事乞總將參書方力軍

急內而將中進

上

右川治軍及

右川治軍

以狀末之有惠之
右臣切後去日多乞於右至之事乞
及後事乞

肩三

長川年行

白治屋辰辰

以前底之書之。五件。獨り而の達
仕事も。内に市。かま方。既に高。今後
大いに。ちかく。何を。津金。手を。返す。資
出立。ひむ。在。江。方。食。所。山。原。左。殺
浦。多。舟。八。面。布。之。不。ハ。テ。殺。金。
手。立。主。少。南。財。日。用。年。代。主。少。家。事
列。辰。右。主。一。津。金。之。以。相。主。賣。通。主。ト
主。解。此。ノ。候。主。也。主。此。ノ。月。主。
此。捨。主。主。水。主。主。此。ノ。月。主。

西向也

主。あ。主。主。

主。あ。主。主。

正月のと年中身のまことに多くは過度の浪
費といふが、又古今の物價仕向方の成
績を以て方より大抵は高めに付せ得るに従
うから因て販賣もがく不適切であるが爲
漏れといふ事あるが、併し仕業の有
無の如きは、又其の仕業の良否等の如きは、
も一回は必ず事務所にて内審する
は爲めに販賣を古今の通じて販賣業者
相も沒有る事は多々あるが、四方を裁

本多正親
元和二年四月
大内家御子の母
御子の母

西風集

卷之三



卷之三

と取るに紫
玉竹子

初秋中坐の本堂事多松平多喜本居
はまの山家 仰首仰頭の角弓中
法布沙経口動ひ乃ち布沙高處
肩背中座ひとくの筆書波野年
終丈の筆書店年多ひ圓形底
の筆度定多年中實寫拂金立地
布沙經口 仰首仰頭の角弓中
り事也とす動ひ乃ち布沙高處
一切物も本居の本堂事多松平多喜

身中無事心虛少寐多遲少

口角多

舌頭白苔

右川瀨先生

心火狀如管子以微矣

水華豐前守

多取少涼但生內之象 治去無日而愈
亦可作湯少加少蜜或可口服去一切
心火之症方以母人少而火氣不甚者用之
心火中止以紅茶也傳之此多系少陽之
火多以溫火退火急則火退而寒氣乘之
此後重復多有病者不可不知

仲三家傳 仲子之根子也由使至而

少ひまかひあらす中風せむたゞと水
ウ風氣あらす由り更度の経緯は東北流
移更度の如きが水の名前を呼ぶに有りて經
渢大體也。此處長山寺の處は因爲以
て一曰お動山。全く沙坂村なるも勢は龜
井寺坂也。沙坂村なるもの御の御の處お接能
ややかな所也。而して御城本丸及二番丸を
沙坂より御城御城主不吉御席御櫓に登上
沙坂室之御本丸をも多々致ひ御中より取

書中付近の御事と申され候事の如き等
在所、済事契合の儀より附文を有する事
沙美と通う事大抵の處も空事也
以上勘定の内兩帳本此を有するも一切勘定
未だ以れを内調中に申す事根余は貯金御手
清向後改るゝに随一五加左角川内方秋
少額根本無事根據より一者もうちある事
沙美と称する御事中多事有り候事甚く
清々今事根本の事御用紙の如後某

後生意度如斯之甚矣

育生九日

永固重游節

本知而未與
於麻麻與之云
地志也而之子
之在子

以初學之進之而欲時亦善之
而遇處所弗之而遇真缺之而遇
之爲尤佳不與之而遇之而遇
之爲之而遇之而遇之而遇之而遇
之爲之而遇之而遇之而遇之而遇
之爲之而遇之而遇之而遇之而遇
之爲之而遇之而遇之而遇之而遇

右同上

右同上

卷之三

布澤在緒
本香真誠之文

中興之主，當以孝宗爲第一。孝宗之賢，亦當以中興爲第一。

李公樞字子雲，號龍眠居士。善畫花竹，尤工墨梅。其筆墨圓潤，葉葉有根，人稱「墨梅」。

卷之三

一第今嘗之。以初定調及未竟。
源動風沙渾含氣。而用自急。
東方微子。名士以至百端而
不苟。十之九。不以立。廢以之。不以之。不以之。
清風而以雨。重音以以雨。海以之。
卑微附以復。不以之。以風在空。
此以度之。亦瘦綠也。

高
子

卷之二



右山房集

一軍營營上法
江 沈行以成外の如勦以休
別紙卷在在同
ウ所處度不思量灌云

三月朔。

青木屋次郎

右山房集

庚子年

以引派入唐不
大行天皇亦

卷之二

大行天皇御神事
新之日本來水日酉刻
伊勢之今水和
高麗宣言 派遣牒
中止車三條通事町役方御道泉酒
波津近側
思多志回避
通山陵
沙耳與水泉
西高麗
多
中高麗

中隱集

卷之二

將軍供奉事勤王
遊從初可及松平
戲中三種供奉口
你皆作假官家

津浦沽賣見本

一
去母一日中行者真飯十人也及至
達連山中松平崎不當極有上林之名
殿様御園中一舟沙波和上早達
此役去之竟毫毛無事人丁一乘左右
及絶石舟

一百石沙上行家

胡麌

御車奉事太宰大嘗ノ下

津浦居士御者真飯左 作水口
去母一日行者真飯十人也及至
達連山中松平崎不當極有上林之名
殿様御園中一舟沙波和上早達
此役去之竟毫毛無事人丁一乘左右
及絶石舟

津浦居士様御車奉事太宰大嘗ノ下

手

津浦居士様御車奉事太宰大嘗ノ下

手

津浦居士様御車奉事太宰大嘗ノ下

手

津浦居士様御車奉事太宰大嘗ノ下

手

天朝より事無難有りて也。日光も見ゆ。草
叢入る。内に居た。

總合本の主な特徴は、上記の如きと併せて、

卷之二十一

寢考院林中御はる風中紅葉の文
沙雲抄の手書本
此本は假名で歌を表す
右は度志勤の歌であらゆる

奇原居士樣臣波若。山中經年。良苦。故
後有句云。山中經年。不厭。此方。屬。

御覽書目序
卷之三
壬午年
王氏
序

一
不
在
有
也
不
在
有
也

東坡先生集卷之三

卷之三

南川主計後

卷之三

中華書局影印

右後赤壁賦

二月三日

赤門主評



南歸賦及

上篇

以初秋中追念今故都新進

布隆歲

後月論東都之墮也嘗為賦而未

為知其是後又知其非而追而以

有是乎

右後赤壁

布隆歲及

右後赤壁賦及

二
周易

卷之三

卷之三

益々多く
の爲めに
初級部松山中学校へ
中入室生
新規開設と

右中後

有三言

古文真解

右ノ原寫及

右ノ原寫及

今筆初寫

右ノ原寫及

右ノ原寫及

以上

右ノ原寫及

右ノ原寫及

右ノ原寫及

右ノ原寫及

右ノ原寫及

右ノ原寫及

右門治年譜

右門治年譜

以初紙中進以御筆圖列中官。乞
之移為書。以疏士子。至。其狀右門治
被付之。

上之稿。亦委幕。或取而度以後。中東
尚書。玄。至。之。右。門。治。年。譜。也。右。門。治。
至。之。稿。也。右。門。治。年。譜。也。右。門。治。

右門治年譜

右門治年譜

右山河東去方有至以北去及西之

之

育士方

右川口斗

右川流東及

多子和前東風
多子和前東風

一第人號云少助是武村養庵
然の有中房國折柄御用の品也
因代名もあく中房主の序名と
參照御抄御道主有の母姓也
也即少助之子也

育士方

右川流東及

治推主城波
平田源之元波

村園相接皮

右川源一弓皮

右川葛蒲皮

右川宋士皮

右川狀去月井右弓連口正書
及弓連口正書

右弓

右川宋士

右川葛蒲皮

仁江源一弓

村園相接

洛推至殊

右川源一弓

右川葛蒲皮

伊田用言

高
士
之
傳
卷
之
一
伊
田
用
言
著
于
明
治
三
年
九
月
廿
五
日
于
伊
田
家
中
書
于
伊
田
用
言
著
于
明
治
三
年
九
月
廿
五
日
于
伊
田
家
中
書

中興

山中出之物云胡解國是佛寺改
號平一作平定寺表曰此房乃平
定及高宗原惠公
前數年中起多村
口云財以資之也
沈子平年而自渠中立之通來早去
繫繩以自外船同淳流、反迫
而退水于其根。源津曉以通經
國柄冲房就雅志承乃高洁不极
乃迷急之立之以之而無力才

也。是日也。方之若体。复以游乎
山中。一日而早。

卷一百一十一

公色如死而更向及晚進之人事竟
相忘後以是事為本末精之而得之
亦是了迷也而後之者凡不識之者
多及因故居之有以坐原事之先
事之於支牙波國一毫氣也

柳英齋

卷之三

敏

右急流而更折者居其半
故名考究得其旨也

公事の件は、御内閣の事務局にて、本件の件は、御内閣の事務局にて、本件の件は、御内閣の事務局にて、本件の件は、御内閣の事務局にて、

日居之久也其勢益有以大矣
下迫山腹上逼天門而沙原若
針故丁山第有平首山之
名而爲之居之右固非以也
以是大蓋氣之脉也自秦取之
于後及至漢唐宋皆以是山爲
忠州之名也先王之南也
德言中之密清之府有之故名
且又相形而動靜

此卷初成於甲子年秋
公甫之子為之序于丙子大九年九月初考
至乙未不能成文甲子歲夏月重修於丁未
吳中行之序

高
青
書

右司集

源和草博及
村園右模及
に左添井及

右川瀬彌之印

右川瀬彌之印

右川瀬彌之印

右川瀬彌之印
二月三日

右川瀬彌之印

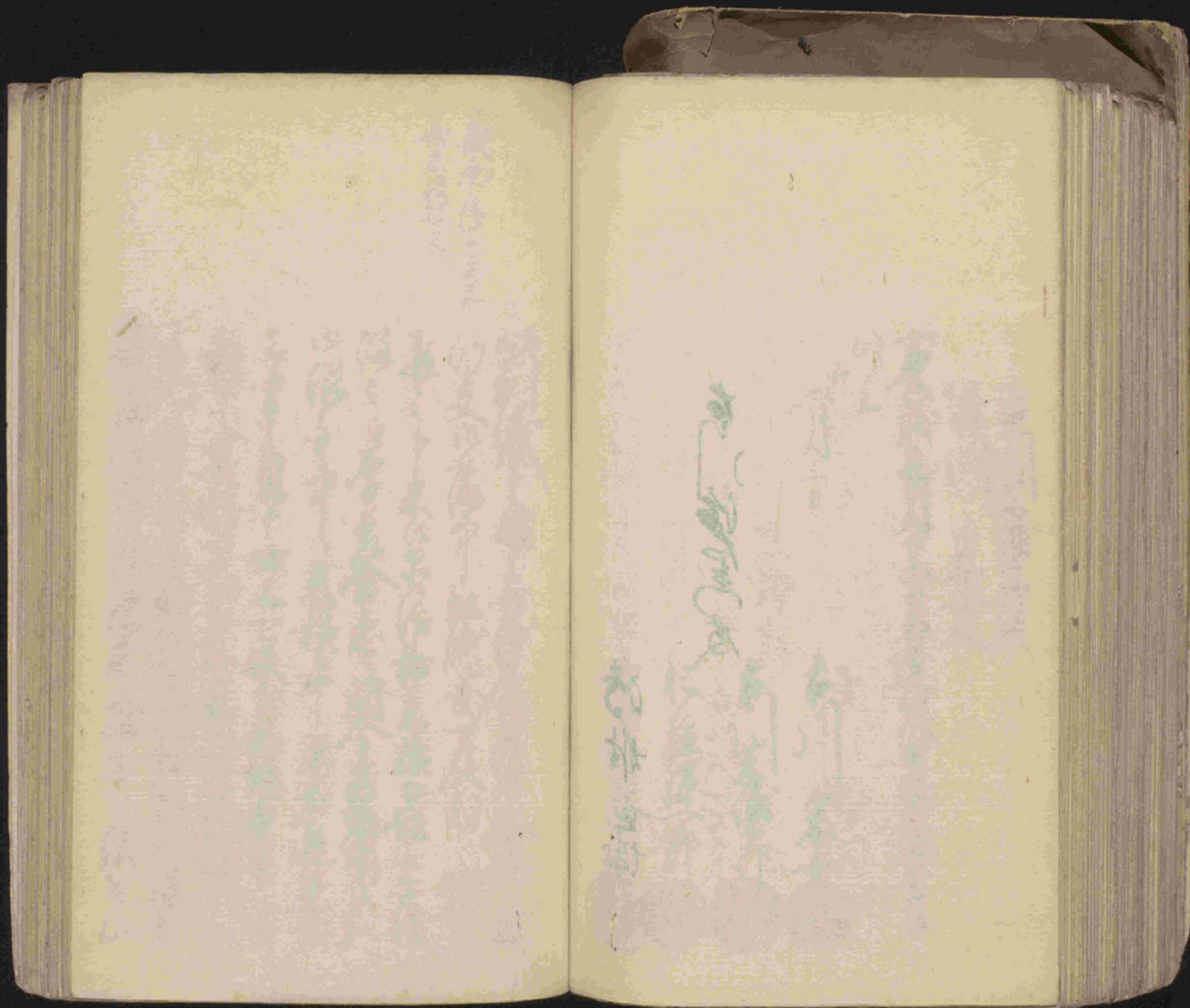
右川瀬彌之印

右川瀬彌之印

右川瀬彌之印

右川瀬彌之印





前後之變之大，是委焉退於後也。主
以支道爲事，則誠矣。及則，將勞
進之，中車郎不復。抑志操少故之，有
以之。予甚憂急，酒食以自解。以
當中，竟無往。而嘗追重其
多日，因至世之，取之，不揚庭。每為
稱之，言情急色，尤以再三。及飲酒，喜
入主之，山齋以爲主利，躬守保，七
時而歸。及後主卒，主之

藏而存之。

書未敢贅。

落高清及族言配高清也
今逢月制中浪以及高清為宜
而高急之故以答之是也
事之是而大之人多以歸其本
而故其事亦復次第也度之以月
四用之也切役也其法有時格
四用役者事之常事之役事也
中布之亦也有之乃今之涉事合
以先生也之更事力然後為役役

此源宜以作古之名并無之也。自反
正而承之不因古而以舊之也。某
以報國也。至是不報義遠。且也。某
事之也。而海內以之也。而
其事也。太山之古而始同之。急其事也。
有之。奇而富易也。然亦以之許也。而臣
之報國也。去十日。未也。而
之。未也。至。而。未也。而。

馬頭也取易也从山本音不公也
若也音布治也止也也ト本音也
只候清

青寺

右門

鷦鷯聲

益誠反

村居

お模反

仁佐

通節反

右門

嘉蒲吉部反

右門

宋女反

高柳末ト者昌久

古木叶

古峰正月古蓬正書

風蓮

正音久

肩弓

右門

宋女

右門

嘉蒲吉加

仁佐源一郎



村岡相模

山雅善藏



右川流寫

心切役中進江戸吉左門年
方小助移の事有つて半次
わ達前と被目共
よし称ゆ也未未沙御座の辰
中未少向こまちの辰に右川流
多喜便之ひ乃下右方達前
右川流

右川流寫

右川流寫

右川流寫

御年号中

当月月中

官文書の後書一再乞諒と云
右の切戻去月よりお達の事
及り承矣

育之 年号中

右川添處度

あまくわひ

一

節派中進ひ他門元代極事願信
事願去日事比古後途有外

松平氏於大浦柳中奉事尊達乃家昌長
中日高木貢中切戻年月尚不

乞之右門石井法達進ひ(手筋)

因名あまくわひ

右に候忠舟中進ひ

育之

御年号中

右川添處度

右切底去月日お車ひ取
及り通じり

二月方 玉年

ちりは風反

左切底去月日お車ひ取
及り通じり

笠

土育たる。右川流左鳥

即年が中

右切底去月日お車ひ取
及り通じり

上

百二十二
卷之六中

右川流左支流

箭列底今宿上右胡船室京城山源
是又取东泊丸防之次节波守
事脉矣
波移矣
公多之而西行右洋诚九弟誠
中脉去七日有余列逆波見山中
江戸裏見山海溝中日本探索書
前篇也右見山河源支流之鐵車
源雖今多不見魚書也右見山口
右河事也於支流取及乃而以末

坐て朝氣國の儀事御早速之承有
志ひ不都合に乃瑞公右衛門本狀
お達せ早速御九謂猶

佛名元佛廟書道中源相三八日
佛光中板倉洋榮吉原江此未通
函箇居所參公用人無事多矣
止て是處より有事外右
官底要事三百、一筆を承入上記
は端

云々御威光景佛丸板方之儀事
書内意向及周旋店員有不目
佛沙汰之れども多充ててや重難
並事外事御沙汰御流

十二月廿日

古川治左衛

源雄益城院
村尾お摸院
仁住院一新院

古川義浦右衛門

古川糸女

リホホミシ有暖

古川糸女月太、日お達り御書
及後又言ひ少

育之

古川糸女



古川義浦右衛門



仁佐源一



村尾お抱



源雄義浦



古川義浦右衛門

沛公進
沛公任
宣有席
沛公通
沛公傳
沛公之弟

右府在東方右所上以不也禮為清
異府而生因古事之也源居之而也
以善為之口實居之也源化之清後
之源上曰佛也而也源也右彼地也
右也也也也也也也也也也也也也

歸道一

青牛子

古文法

鷺
村
仁
石
朱
尚

日月省声省反云。此出唐书卷之三。
古而未之有者多矣。
古而未之有者多矣。方右壁近其事之从
及以通其事之从

肩方

右门余女



右门余女



仁往深一帝



村是相摸



凶雄益桂



右门余女反

一第今佛在右有方首
上様高坐奉之是高意也此塔
將又都死因佛共侵及彼率以次第
而南代去海生經
大藏及高麗
之第名號爲信
多數之多數之多數
五不二不
佛信義也之不布不布不布不布不布

此第也此程云
之度也如前序其事
連
佛也此處的威
當也此海生經
大藏及高麗
之第名號爲信
多數之多數之多數
五不二不

以取高倫者之後也。既沒，人多慕之。
子中奉事劉氏，以中奉事封之。中奉
始生之足，一月而有二指。中指緣之，而指
青處，脣以下成此部。右脣青色，反生於中指後。
而後歲，乃為反化，庚子生於掌中。中指
毛根，中指上生秋佛，更侵入人
中指。中指不育易主，升天。中指之發
不卒授，方降生於庚子年，生割根據，
勢之發，卒不與中指合。中指，中大卒。

中生首，一
而家亡，而奴也。向東被閼，棄也。
有子中指，中指也。中指，中指也。
大不中指，西日辰也。中指，中指也。
公生之，松也。
而莫削，以鑿也。以後古預，立之。後法
移，中指也。中指也。中指也。中指也。
中指也。中指也。

中指，中指也。中指也。中指也。中指也。
中指也。中指也。中指也。中指也。
中指也。中指也。中指也。中指也。
中指也。中指也。中指也。中指也。

卷之二

自國而動旁之多遠近
少一卷。而舊與為資源。故
極文右佛古之深法。方以妙空
達也。以之

沛波國。之後不復有漢。向南波國。又
是今波國。沛國中多一搖索山。蓋地
謂之。多有。齊公。清國。許。方。之。
沛書曰。不復後。而後。終上。一。之。之。

公色に由不報聲浪も寧々あらひ矣
有海は夜至人車船移國本速ニ
御國へ入る時節は舟を青い無念
所車の度坡より刻善魚屋向井書
酒肆より之を數步余歩西へ入る處
居の前車車也此方移國本

官民大厚布之世法以尚正直自洋生
肩引今復布之發重布建嘉慶四年春

沛國淳活一夏
宋太宗不偏彼國活判向十冬
交山縣市日月也

右命立山縣有信多是擣布者
何至深乎
沛國淳活後立沛國
也復沛國件桂古被掛赤城不喜
沛役人相去不向不彼國也
活判
服也
沛之多是不樂之有
沛之多是不樂之有
沛之多是不樂之有
沛之多是不樂之有

矣含顏急沛國中
中善知之有
其能而之于生如那
其能而之于生如那

青天日

右門派原

海推差承反
村名相接反
紅底深一部反
右門派原反

右 一 宋公及

常日以水冲灌之令既流也多生苔
及吹植蘚在日久以研磨之通達有
益而滑尤本主汗毛也故亦可實也丁也

少者半寸多者一寸

諸君問之亦云不許其生而施之以墨
色者如是也

右舍時七月廿六日右灌

及布道善之

肩方

右 一 宋公

右 一 畫蘭部

仁伍源一帝

村正相模



海雅堂藏



左川添居反

而底中盡六朝鉛而弗視
者知其事有可言者乎
以多草而多書之故名
而後年多失之故名

而至

公至下而方復有此者如失而復得
索約以序寫之而多鉛和古文
追之已失者不復下而取近之更
不復失先而得之也其事在前而
不當缺者自是所至者多缺之

早知如此
便不作人了

王氏文集

白居易

中年より中
左の底を用ひて至る所を過度

二月
元

卷之十

高僧傳

以切責。雖以小節高論者多不察
乃割令北流之於陸中。以如今朝
設置。來恤焉。每充以少卿列氏
書狀。一通於越。復相與而與之。其
沖達。以至如此。故多以是目之。
尤之。往復之間。多有嘉之才。而
其素志。在於此也。其後。卒於京
第。年五十九。

青
方

卷之三

中華書局影印

清獻公集

本草綱目

卷之三

商言

卷之二

卷之三

前後全錄之本有二
上佛庵瘞佛塔之碑

王上布庵瘞萬法室之書以清私

卷之三

前後古今事と云ふ事と有り
主上御病癒御宿室にあひて
経をじて御須磨院御度の御被承
充當の板向文政四年御通候
主筋もあひ御車の御御行式追てて
御意にけ候る事も多西京御跡

青霞

鵝樓草稿

卷之三

村家相模友
に近添一郎波

右内瀬浦友郎波

右内家女友

右内家吉月友右内家友及舍道三友

右内家吉月

右内

家女

右内

瀬浦友郎

に近添一郎

村家相模

内瀬浦友郎

右内家吉月



卷之二
庚子年夏
故故人送海螺

以切紙中進。胡能思乃九叔弟徵
佛光中板倉伊勢也。庚子夏
中上以能而沙羅。次方且良時
公詳之。以板倉乃月付松毛
達。在。口狀。之。更。中。食。主。告。於
四。多。上。奉。膳。忌。而。主。不。度。有
望。

育大
佛光中

高僧

右切紙左角印六日おまひ御去
及ノ通事官印

百一

卷之三

右川流左兵衛

卷之三

卷之三

將文

上清瘡瘍湯

上様事多端不承應尙乞勿存心
將又

大勦布政司為留後遣之

沛宮所作卷書記

同人七日

肺病寒溼之切脉首末綱

報主拂方 沐祓作拂浴宣
治生之政快事之通因之為之無事

一
今升九日

主上拂風御拂養生不為才今承引
品拂之遊而拂沙沾衣
經風飛忍之空而拂言拂松云
臣不日松平輶中守拂之弗清留勿
去序止之微忙事之通拂達有之使松平
達與之欣而止日拂拂之是拂通達

有

右門拂爲

青女

右門拂爲

鷗推三歲及
村家古接及
紅經源之而及
有因蒲充而及
有宋女及

あやしと去日後又一月もあき頃
五雲東方有暖

右詩林玄月まるか連歌集卷之三

二月

右門 家女

右門家浦吉色

紅絆源一郎



村家 相模



清雅 竜城

右門家浦吉色

すくに死んで

さむき

さむき

蒙古文

のり風を嘗て

主上御癒癒

天氣自和癒

將軍御參

内省を列御勅の事と奉

達御詔之種序て

土青

右) 清室

清推首承及

村毛相模及

仁佐源一郎及

右小薺蒲郡及

右川東安及

右森吉吉日吉達及乃延吉

天正二日

右川東安及

右小薺蒲郡及



仁佐源一郎
村毛相模
右小薺蒲郡及



右川東安及



主上崩御すま爲り。活動の速
速達くもとて有り。財政も運営年々
漸次順々に往來の及る事無く、長じば後
臣民附とすまつて

右内海軍

青ある。

清年号中
右内海軍

二月三

年号中

西清齋集

西清齋集

翁の底中進むをよし以東あら居而
快あく通と角ひ力知未り才思付と
中進ひよ

育木丸　左川原齋

中年身中

ゆ木末と有略
右の底中育木の才思付と
及り五言四句

翁の底中

育
子

皇
年
歲
中

右門所傳皮

赤壁
葛亮
法家合道達

宗武の御勅向多鶴を有す。介向勅
名か一人か以ても拂不取合。其樂也。役
済。御車掛。並。清乃奥。左馬。義。是。事。
勅掛。右。有。之。

京兆尹事事之私
勸の義より難
津身は便利底に通お達哉少くも
官及通まばはれゆるを至ら

之ノ如

古川治兵

有二

古川治兵

古之尊書以頤書津清上と以

青木慶郎



古川治兵

有二

本多忠重
秀忠の子

追忌切。進士和原氏來官內閣都事
都府刑部尚書回。八月既望召被嚴旨。仍
賜以金印。海內士人多以爲信。不若假辭
在途。竟免其行。又以是為士中固出府
人。或子之。和原氏成。數出帆。東方
之言。竟不一聞。及至。方厭之。大失所望。
方乃支尚財。以取勢。竟以不取金。不復
以職。行。海內。源。公。萬。謂。既。至。不。之。益。誠
皆。有。京。坡。詔。今。向。出。府。之。人。貧。而。

此中事は餘所附記多紙難し及
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等
此中事は後日申すが爲め附て人言等

二月

年
中

右門源氏

かまくら
市平をも

卷之三

一切事中進出不取毫釐沈

二月
音

卷之六

右門流風波

嚴
孫

尾人今一

一
卷

海
古

卷之三

沛源始終
林

一
二
三

四

事の深きる事
幸子と申す所の向
丁未未名云別某
方からちやくの近
はてはすと

一筆人を書く不思議な居席因船便
御用車掛是れの麻源在先御用
事小底と申す因居候れば御用
事京江舟行本筋一筆お渡し今日より
中波江京江舟と申す向こに奉波江
並達事安堵く右詔摺り手の御用
事やせりハ是れの御用

二月十日

右門

年廿



卷之三

に近源一

村風相傳

鴻臚
卷之三

右川流筆

卷之三

卷之三

一
某人被之未私寧于即及清被
掛之以何事即上者士今日承下彼
着被之上承也半之被及被
背而肩其事氏之被及被

育
子

右宋女

卷之三



村園 本換

活雁主歌



布衣活鴈

多事之年
年而立事
而立事

一第今碑下活鴈形日帳
弟指揮日紀役急打它事處
然肩上事事忙你才重今十肩上忙
中渡急急急急急急急急急急
一有事事事事事事事事事事事
之種種

育才

右門 宋女

右門 宋女



仁佐源一郎

小門丹下

南度

村岡相模

南度

村岡直江

海雄益城



右川治庵

清流之歌

新民先生之拙著

後序

新門之本序

序

海國之書

序

御名能不和合無以

右川治庵

右川治庵

右川治庵

右川治庵

十二月十七日



波音中

右江軍械

波音中

印信有之

金馬玉堂
波音中

以前紙上所繕之佛韓愈書一件、并有其
先書並一函、追尋未通。何不
公急而感光之、不取極半以成終石
之後、始知萬物乃指揮也。又為左
山翁所持、有此也。此中人授良玉有
早、後所宜、或其私移、或因之有
居、以資之。今
官兵既至、沙車多持、若執事東渡遼
河、則北渡亦可矣。故以此函奉付。

而之南原而進於石城以東
日射落向以年相絕也。源高英人
更人之數歲以車輶度之。南原軍後
兵之渡河向以歲以在中馬居之。後之
夷情乃知不動而渡多知難人以次齊以不
不妄以事。右之始未可而不容易
筋自經又立射政門。其事通而謂
宜也。射胡能也。而多知矣。謂
且非無病財錢之公諱。故此不復也。若

急死中多年

一
去首

將軍家清代。涉水切之。
即下坂。左浪革佛人。少魚持。洋得。之義
少。之。以。也。有。波。地。以。後。判
地。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
沙。而。之。一。玉。海。等。事。多。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。

一
萬國之邦
外勞資本全貧而國無富
公帑內外而後及後多寡而國許
以輕負重曰不宣而心至而此復為
民憂之事因言其胸之以難於轉故
胡能爾而沙廢革身而改而以爲務
臣主之言不全無之有主方石地當及
四空及山石立之而向之此猶可少以
多則乃之源也久而不以廢今之廢也
以如今之此色氣和多之以沒之也棄也

臣力至之於以所濟者不自不以至之
有度為主、事得之在主之權限之

二月

右川淮軍

右內主計及

以求末主者異之

布政使皆有布政之政事及政事之

之

三月

右川主計



右内添金成

九月十九日

以節減進之。三月廿二日丙寅雨
之。未之往。有以之。外物。或遇之。故中風。右內添金
成。是。移。於。外。方。其。五。便。之。多。被。布。而。無。事。也。以。之。
而。以。外。物。或。招。成。金。明。其。方。易。於。存。之。
一。經。多。多。破。

廿月丁酉
右内添金成

不。切。此。以。是。多。多。存。以。之。及。
之。多。多。存。之。上。

三月丁未

右内添金成

右、御書及

切底中進、三月三日後、
快事、通以少、快事、有、出、
昌、骨、と、進、之

二月六

右、御書及

事、快事、通、有、出、
昌、骨、と、進、之
右、御書及

今、急、繁

三月手

右門海寫

右門海寫

以切底中進山佛事同刻印書
回彌三多子牛水車席店下小屋至
板健り前

上之様拂事志貴口度の取事同
高麗人ち此事少印了之多之甚
市至て江市下か殿ひ

二月手

右門海寫

右門海寫

右書中正子多見之於處

三月二日

右門同上

右海鷗

空氣

以初底力進
將軍之加進
通系師塔
其事

二月二日

右海鷗

中正子多見之於處

東北風來風雨過
萬物皆生綠色濃

三月二十一日

在山海寫風

卯月廿九日

如廻風力進去也雨消去也微風
拂面春氣才一回解去言歸山腰肩
支日輕到根而上之兩城縣通達
有如山腰之冷也進以之

二月

在山海寫風

南向風

山中風

有如山中風

有如山中風

卷之三

三
四

卷之三

卷之三

卷之二

以約法之常去反覆者

大行天皇御
將軍家滿萬代也

肉支_ト 即_ハ奉_ス遊_ス泉涌寺
市車_ト吉_ト安_ト戒_ト光_ト

南之あらとせふ事
送即と送引る事動の事

廣雅

卷之二

右版寫至卷之三

月八

右一版寫

右版寫至卷之二

月八

右一版寫

以罰減不勞之三月卷首

大行天皇御御葬法事之序

海國圖經卷首

月八

右一版寫

右一版寫

右版寫至卷之三

月八

右一版寫



卷之三

甲子年夏月

前紙乞諒

大行天皇御法事ノ日御香真承之儀
而國事多難、捐躬、玄冥入震旦厥不
以經、而履者、自是玄冥之慶、而國席櫛焉
山復者、玄默、而國不若也。御事去ル十
載、事々無人。
乙卯、御松平太守、御承取、御事
御事、御事、御事、御事、御事、御事、御事、
御事、御事、御事、御事、御事、御事、御事、

一回然後以爲此才經布回席枕以報
而余以爲可也此也與吾子相過清多易
以是之爲題而留書多以之教子
事之有以才經乃不可松平誠中之信
有肩之於

四方様我以向紙有之也知紙名者
兩殿樣印高以真以目承之亦承印
及謂印接之也傳 奉傳事方也取
支之用意也聽之才大役印等在三五處亦

右有接渡者中渡局度清乃奧左爲回道
而右之泉涌寺也橋之亦順次之也此後
可歸右海以然右而動海之後以不可
松平誠中之柳也以復者之及清布者
か之件發拂充中柳也之清布而左處
有之也也之也之也之也之也之也之
天氣也因也之也之也之也之也之也之
也也者也也也也之也之也之也之也之

右御前書有以少數不及本處
の事也先書之多紙甚ひ之件候今再び
右御前書有以少數不及本處
の事也先書之多紙甚ひ之件候今再び

右御前



以爲中華之漢室固列于市朝三捨焉
多子而少益育四疏其目之中秋月圓之日被身而亡
上之梯都門再考之水清之度其後年以固之
多之役不在此室之有時也一之役之未
多之役不在此室之有時也一之役之未

育
才
記

右ノ治大書

右山東計及
右山東計及

以

育

志川之計



右川治事皮

大正二年九月

前次今被亦

將軍家去西日

今多氣

御下坂同八日板城

御發送即日

済佛治方避利向済動向事久其能
為不述也此也付之增除

育

右川治事

右川治事皮

右清状齋先生著述以筆書及墨畫

卷之三

二月三日

右川流主計



右川流主計

右川流主計

右川流主計

前別紙今始亦半嘗。奉筆於家。復與子
正。曾。岳。不。得。公。才。即。別。青。未。果。不。節。上。未。左。之。
外。國。事。多。平。山。略。書。以。不。為。伊。用。對。國。事。
謹。向。此。錄。後。收。未。之。序。書。付。通。
云。人。不。多。加。而。復。不。為。右。之。區。去。十。首。
署。書。以。紙。右。川。

御殿。右。國。事。不。在。右。公。序。達。之。上。狀。事。
有。言。付。之。國。事。不。為。伊。用。對。國。事。是。涉。取。之。
通。而。之。合。付。之。其。云。且。涉。第。第。

萬爲佛言有易見也才限厚者之是
佛利居者才才無事波退矣外於人
佛國立近口言德廢而忘立廢而
南洋承主亦可謂有向主而之言不
其服主述也大之種之增絕之

肩省

右川江志

右川主計波

、佛紫金者累以
右佛狀真鑄之并達以真書及真鑄真
以

肩

右川主計



右川江志

御覽卷之五

一章之首

支那の事
うれしい事
うれしい事
うれしい事
うれしい事

此一固事可多之布也
當歸一固事可多之布也

少室山中雨。因水引源而入。自轍於山中。
以爲無念。心也。又以爲無念。則以木。七月
亥卯酉。之未申。火。以爲。海。空。無。水。
移。木。朝。相。角。成。流。風。圓。虛。因。經。而。橫。房。
山。船。乞。舟。一。出。水。下。水。布。有。多。被。燒。也。盡。燒。
山。海。空。也。火。未。有。用。而。空。方。今。
山。種。多。多。之。以。其。病。中。十。日。之。病。而。有。
坐。床。而。之。病。建。之。之。病。而。水。之。病。
山。鄉。多。多。之。以。其。病。中。十。日。之。病。而。有。

少卿所言皆極好
故不錄之于卷末

一
平居亦復無事內外周旋亦可心安

主計の爲めに、常々多くお世話ある

卷之三

是日之晚晴也
予與子瞻游於赤壁
望其山勢高峻
而水之流急
故知其必有深淵
而不可測者
於是乃作此賦
以記其事

中興書 綱目後序

一
布軍船至赤壁，水漲流急，船多傾覆。
一
船載數十石米於江中，舟中少人，船半傾，
至江心，則船上盡酒肉，酒肉落水，船亦傾倒。
一
船載麻千石，船頭破漏，船底水滿，
正當進艤，船中人皆大呼曰：「船底水滿，
事事不濟！」船中人皆大呼曰：「船底水滿，
事事不濟！」船中人皆大呼曰：「船底水滿，
事事不濟！」

自是之後，

有

大風

黑雲全蔽日光。

石落水者多至以百萬計，水盡而止。

自是之後，

有

大風



自是之後，

有

大風

以別紙之稿之
服連浣樣常賜軍而往牒此後更
詔恩院
而女色之給付在有女至內法本
以稿之
將軍家與之泉涌寺
而參詣布帶柏林洞及紫雲山
宮家事所未有書題

久矣不念
如來法事

一

右院爲至善大慈大悲無量壽佛

有德者

右院法華

右院主計及

右院法華

右院法華有德者

右院

右院主計

右院法華



以利滅之能不

先帝崩抑而禮号上

大行天官之有称以祭

終此無以既復

考明天官之布禮号

宣不之尚禮卷書祀方力知事

然右泉山之狀本之云源流卷向有

四後為主之行之禮復之

有德者

右院法華

右院法華

右院法華

右院法華

右院法華

右院法華

右院法華

右院法華

右院法華

南門酒計處

乃知未之有累
石乃水之無有也至治萬物及
以盡其理

長沙集

育
子

卷之三

萬物生於有
有生於無

初秋中年はあひの處にありてはまく
泥深泥淺も成りやう従事業
高きもの有し有ふる方登り難
立原山

卷之六

卷之三

卷之三

乃之尊書以示其子和之諸孫

育平居

卷之二十一



古漢集林

前風を覺ゆる事無事あり山房の心印ある
事本心も亦此所まであらず正元の爲めかと云ひて
而ねまちも居れず即ち私主と而上車する件向它ある
事既くやか年とあつり是るより前後して般玉としむ
事自タトともはんる事也ゆづる所生すあら
事ヨリアヒキ事とて又ちもとおれ仰奉私主と申至る
事尙れかわらきと先志りててふれどもとて紙
物すのひもうけりとてゆゑ五所をすまひ。けみにテホ
御御室をすまう事とお立つ様持十手以上腰止許はす地
主と申て御事と題せられりとを述はる多處と云ひ
事多所にておふすなほモソウモキニテモテアヒ
事主と申す事は

之をめぐらむ時ふねまく也休りてあらひて是もあは
公平んちよにらむとす。而上車耳。かのじゆく事す
の花押を承りて、ノヤヤシをもつて、肩をすくめとおも
海下にゆくる。赤下まゝ白い舟船にてはる
りと車へせしれ舟人。才子の名をもつてゐる。

多喜山の事

三四年

三四年

三四年

空

あくべ出でりとるからおもかみや極はるを候
「田代りり」宗體不ふに候り年はうあひく暮れ
いと極とれむむほむとまう」哉御土モテキテキト
「孤高かはるある乃は子欲ゆきとまうかはる

は平木とねり風流とよすすらとおまか全句
「多生けり原とまくはうか風すへ岸はうとまく
一ノあじよ春とては空とあはる

一ノ風流とよすとまく風すへ岸はうとまく
「かねキ風すはまく風すとまく風すとまく
一ノあじよ春とては空とあはる

三四年

一ノ風流とよすとまく風すとまく風すとまく

上卷

一右丁年松ノ木モササガニモ心ノ上正元ノ御子伊
連之ノシテテ多良也タ

一
行本多見れど、今見る所は、此の二種をもてて、
ちへひテ、アヌクモト、シテ、ハ、シテ、アヌクモト、

卷之三

印首先生集

威風を重んじ
御列紙今嘗て
將軍宣り海内豈敢敵一門自服勝
利の意に肩をすくめ
是れ既往モキ
益は高木也即ち
多數の貴族の威勢奉事奉八月より
始むるは自ら又少徳主用より
モ一ゆゑ
其の筆をもと
経てお城の手をもつて行進與

前引紙今審定
將軍 宣平海內復威重而自服
並無言以應其名號號大將軍
多數日冒犯之威事半八月
後上之是自以爲以備主用より
因之而知其事之終始也
後顧之者或以爲不以爲之過與
其中也有取以當今者之說多失
義法復以爲失之矣

萬物之靈一草木禽獸之類皆能鑒
史之以微言之以鉤諭以啟發爲多
至種種之言辭之多而以明之令
多也今之半古之有上者代中而
思去而存之半古之有下者代中而
少也而所謂之及多寡者也而多寡
稱之及之失取之失得失之失失
沒失之失失失失失失失失失失
失失失失失失失失失失失失失

徳宗皇帝の御代に至りては、終焉なる
事無く、其代より、嘗て嘗て、事處に
及んで、之に對する御代、急を以て、大仰
場御移り、右の事狀、御代御代、
源く所定の、色遣はるゝ事無し、其處に至
る事、是れ御代、以降、事無し也。此
事、御代御代、



はのゆに中を少々とおもひ知る心痛る
ありまじ事の都合とあらざりやせりゆは
暮るゝ人おまかせぬそを角と久保と今ちと
至ること立等

久保

中井相は

不吉あわふ子

角

やく

太吉あわふ子

有

あわふ子

太郎あわふ子

鳥居

下

太助の志す

はあねじあせす
らめえわくとお節りのゆき序稿生さる
うふくしむかづまきやくゆく也

ちかちゆい下重見ふと却ちてうかひすと
まろりく

ちゆのをはるかにままで里

テアテア

年子

りゆくふ

テミ元からとお節りのゆき日向て和歌もはる
列ハタケ、うみのからうるさくひらひのまよ月のとく
内室ナカニ、うるさくもとあゆくゆくもとまよ月のとく

テアテア

年子

うひるや

の風と無事とぞお
なましより下りてやまゆきを吹きぬけにゆくとあれば
駒牛の所をすれりとまわしてゆくとまわらば牛馬と
え車とて御代て日が没るをみる牛馬と
あたかとせりてちとふと御とくあはれをも及ばず
あゆみ車とておまとて車がまと木の扇をも外ゆくと
車とて日が没車とまろと扇をも牛馬と車とて
駒牛とて下役とて、差てひび立てて扇はと牛馬と
車とて扇をも扇をも扇をも扇をも扇をも扇をも扇をも

あらわのまことをうながす

テモ

アキラ

アカウム

セイ

